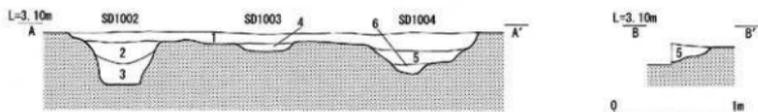
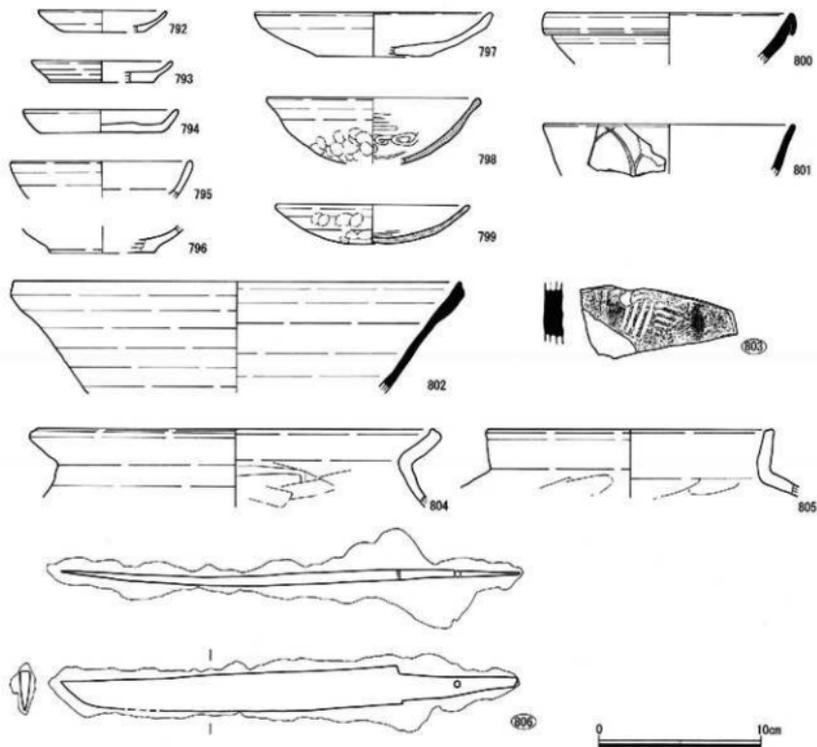


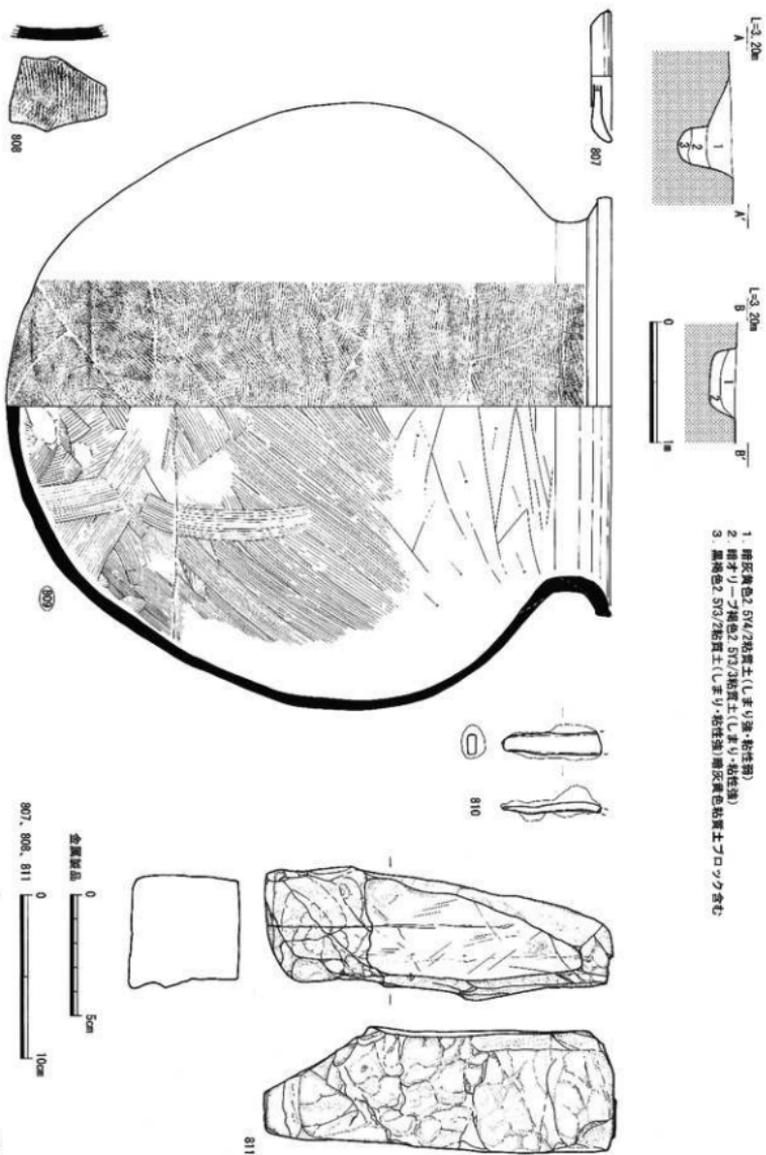
第330図 I地区 SD1001遺構断面図



1. 黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり強・粘性弱)
2. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり強・粘性弱)
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)
4. 黄褐色2.5Y3/2粘質土(しまり・粘性強)  
オリブ褐色粘質土ブロック多く含む
5. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり強・粘性弱)  
黒褐色粘質土ブロック含む
6. 黄褐色2.5Y3/2粘質土(しまり・粘性強)  
暗灰黄色粘質土ブロック多く含む



第331図 I地区 SD1002・1003・1004遺構・遺物実測図



第332図 I地区 SD1005遺構・遺物実測図

端は厚みを減らす。鈍の可能性ある。811は砂岩製の砥石。1面のみ砥面として使用する。

遺構の年代は、出土遺物から12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

#### 溝11号 (I地区 SD1011) (第333図)

I-2区西部, g・h 1グリッドに位置する。検出長8.2m幅186cm 深度54cmを測り、主軸はN2°Wを向く、直線的に延びる溝である。断面はU字状または逆台形状で、埋土は7層に分層できる。底面は北から南に下がる。

遺物は土師器甕、土師質土器片・皿(回転系切り)・鍋・甕(平行タタキ)・土銚、瓦器椀、陶器片、鉄製品片が出上。812は土師器甕。口縁端部を内側に肥厚させ、口縁内面にヨコハケを施す。胎土に砂岩を含む。平安時代後半と考えられる。813は土師質土器甕。外面に平行タタキを施し、内面に無文当具痕を残す。胎土は粗い。遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるが概ね12～13世紀代と考えられる。

#### 溝24号 (I地区 SD1024) (第334図)

I-3・4区西部, d～h 10～13グリッドに位置する。検出長22.8m幅230cm 深度18cmを測る。主軸はN32°Wを向くが、南端部は緩やかに東にカーブする。SD1025・1038を切る。断面は浅いレンズ状または逆台形状で、埋土は2層に分層できる。底面の高さは南がやや低い。

遺物は土師質土器片・杯(回転系切り)・皿・鍋・土銚、瓦器椀、瓦質土器羽釜、須恵質土器椀・貯蔵具、青磁碗、白磁碗・皿、陶器片、土師質瓦片、鉄滓、焼土ブロックが出上。

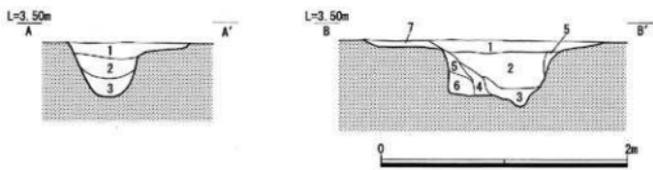
814は土師質土器皿で、底部外面は回転系切り痕を残す。胎土は粗く、在地花崗岩を含む。815は須恵質土器椀。回転台成形で作る。胎土は精良、軟質焼成気味で、重焼により口縁内外面に炭素が付着する。県西部を中心に分布する西村系須恵器椀と、胎土・焼成・形状が近似する。

816は白磁皿。内面の底体部境に段を有する。高台内側は回転ヘラケズリによって凹面状に作る。外面体部下端～底部は露胎である。釉・素地ともに黄味がかかる。大宰府分類の白磁皿V類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。817は玉縁状口縁をもつ白磁碗。大宰府分類の白磁碗IV類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。818は青磁碗の口縁部。体部外面にヘラ片影による竊蓮弁文を施すが、釉が白濁しており文様細部は図化できなかった。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗I-5b類に相当し、13世紀前半の年代が与えられる。819は青磁碗の底部。体部内面に飛雲文を施文する。釉はやや白濁し、粗い貫入を伴う。高台外側まで施釉し、一部段付を越えて高台内側に達するが、段付部の釉は掻き取る。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗I-4類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。

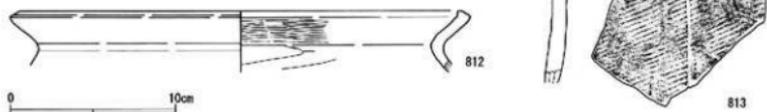
820は土師質土器鍋。口縁内面にヨコハケを施す。胎土は粗く、金雲母を含む。古代末の可能性がある。821は瓦質土器羽釜。口縁・鈎の端部を方形に作る。鈎部は貼り付ける。胎土は精良である。炭素吸着は良好である。畿内山城地域周辺からの搬入品と考えられ、13世紀中葉の年代が与えられる。822は土師質管状土銚。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

#### 溝25号 (I地区 SD1025) (第335図)

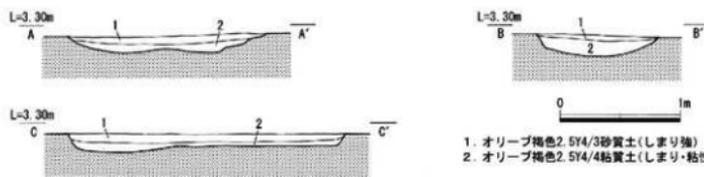
I-3・4区西部, e～l 9～15グリッドに位置し、検出長51.7m幅186cm 深度32cmを測る。主軸はN32°Wを向くが、北半部はほぼ真北に進路を変え、南端部は東に向きを変える。北はI-4区北端ま



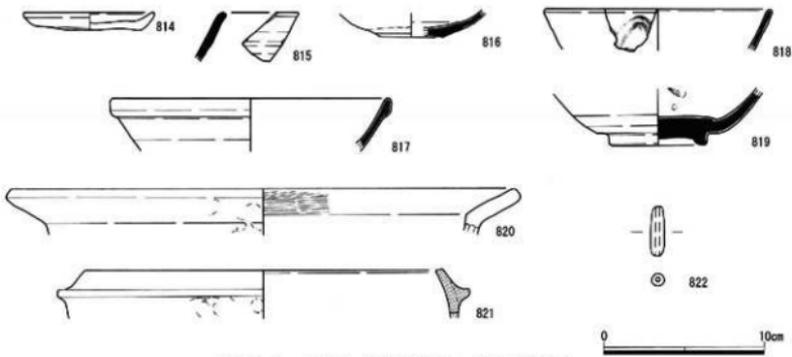
1. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)黄灰色粘質土ブロック含む
2. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり弱・粘性強)
3. 黄褐色10YR3/2粘質土(しまり・粘性強)暗灰黄色粘質土ブロック多く含む
4. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)黄灰色粘質土ブロック含む
5. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性強)暗灰黄色粘質土ブロック含む
6. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)黄灰色粘質土ブロック多く含む
7. 黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり弱・粘性弱)



第333図 I地区 SD1011遺構・遺物実測図



1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土(しまり・粘性弱)



第334図 I地区 SD1024遺構・遺物実測図

で、1-5区では検出されなかった。断面は、北から南に行くにつれて浅いレンズ状から逆台形状に変化し、底面の高さも低下する。埋土は3層に分層できる。

遺物は土師質土器片・椀・杯(回転糸切り)・皿(柱状高台付ほか)・鍋・羽釜・土鍾、瓦器椀・皿、瓦質土器羽釜、須恵質土器控鉢・甕(平行タタキほか)・貯蔵具、白磁碗、青磁碗、土師質瓦片、不明土製品、鉄滓、焼土ブロック、被熱砂岩礫が出土。

823~825は土師質土器杯。回転台成形で、823・824は底部外面に回転糸切り痕を残し、823は板目痕を伴う。826は土師質土器の柱状高台付皿か杯。回転台成形で、底部外面は回転糸切り痕を残す。胎土は精良である。

827は瓦器皿。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着はやや不良である。和泉型瓦器IV-1期前後に併行か。828~830は瓦器椀。828は口径14.2cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良である。829は口径14.4cmを測る。炭素吸着はやや不良で、酸化炎焼成気味である。828・829とも和泉型瓦器椀III-3期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。830は瓦器椀の底部。底部外面に断面幅広の蕾鉢形を呈する低い高台を貼り付ける。磨耗によってヘラミガキは確認できない。炭素吸着は不良である。和泉型瓦器椀III-3~IV-1期とみられ、13世紀前葉~中葉の年代が与えられる。

831・832は白磁碗の底部。軸は黄味を帯び、831は高台外側まで施釉され、832は残存部外面露胎である。832は軸にきわめて粗い貫入を伴う。ともに胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗IV-2類に相当し11世紀後半~12世紀前半の年代が与えられる。

833は土師質土器鍋。口縁内面にヨコハケを施す。胎土は粗く、金雲母と角閃石を含む。古代末の可能性がある。834は土師質土器鍋とみられる。口縁端部を内側にわずかに肥厚させる。胎土が粗く、結晶片岩を含む。紀伊型鐏付鍋か、または古代末の土師器甕の可能性もある。

835は土師質土器羽釜。鐏部は折り曲げ技法によって作り、長く水平に延びる。836は瓦質土器羽釜。口縁・鐏の端部は丸みを帯びる。鐏部は貼り付ける。胎土は精良である。炭素吸着は良好である。畿内山城地域周辺からの搬入品と考えられ、13世紀中葉~後葉の年代が与えられる。837は土師質土器煮炊具の脚部。838は瓦質土器煮炊具の脚部。炭素吸着は良好であるが、内側部分は被熱によってカーボンを消失する。胎土は良好である。

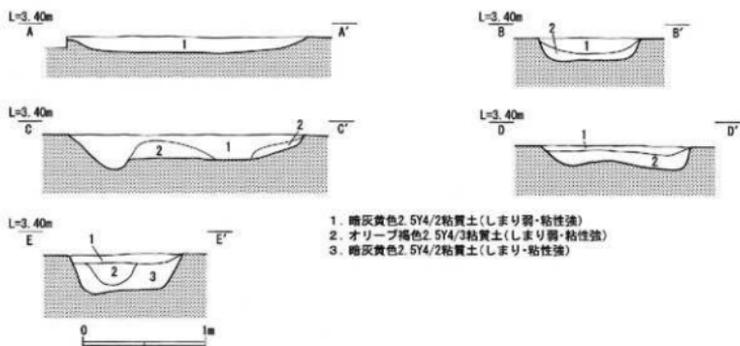
839は土師質管状土鍾。径4.8cmの大型品である。胎土は粗く、チャート・石灰岩を含む。

遺構の年代は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

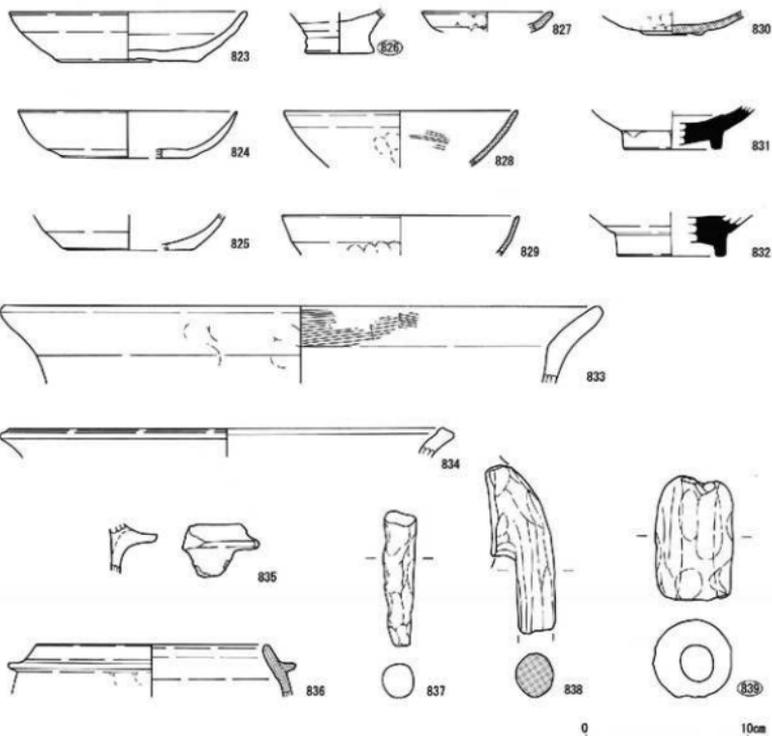
## 溝27号 (I地区 SD1027) (第336・337図)

I-3・4・6・7区、g~q15~17グリッドに位置する、検出長52.9m幅160cm深度56cmを測り、主軸はN10°Wを向く、直線的に延びる溝である。断面は深いレンズ状または逆台形状で、埋土は4層に分層できる。底面は北から南に向けて下がる。SD1028と並行しており、2条の溝で屋敷地の区画を形成したと考えられる。

遺物は土師質土器片・椀・杯(回転糸切り・手捏ねほか)・皿・鍋(紀伊型ほか)・羽釜・甕・土鍾、瓦器椀・皿、瓦質土器羽釜、須恵質土器杯・控鉢・貯蔵具・壺・甕、備前陶器碗・壺、青磁碗(同安楽系)、白磁碗、近世陶磁(瀬戸美濃・肥前)、陶器甕、鉄製品片・釘、鉄滓、砂岩製砥石、被熱砂岩礫が出土。



1. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり弱・粘性強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり弱・粘性強)
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)



第335図 I地区 S01025遺構・遺物実測図

840～844は土師質土器皿。回転台成形で、840は回転ヘラ切り、841～843は回転糸切り痕を残す。845は瓦器皿。ヘラミガキは確認できない。酸化炭焼成気味で、炭素吸着はみられない。和泉型瓦器Ⅳ期に併行か。846～848は非回転台成形の土師質土器杯。846・847は底部外面に指頭圧痕を明瞭に残し、848はナデによって仕上げる。京都系土師器皿DまたはEタイプの模倣品と考えられ、13世紀代の年代が与えられる。849・850は回転台成形の土師質土器杯。

851～865は瓦器椀。851は口径14.3cmを測り、内外面に横位のヘラミガキを施す。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期。12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。852～856は口径14.2～14.6cm 器高4.0～4.2cmを測る。このうち852・853・856体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は853のみ良好で、他はやや不良か不良。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。

857～865は口径12.7～15.4cmで数値に幅をもつが、15cmを超えるものについては小片または歪みのため法量不正確。857・861・862・864は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し、861は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は862のみ良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-3～Ⅳ-1期前後とみられ、13世紀前～中葉の年代が与えられる。857は器壁が極端に厚く模倣品の可能性をもつ。

866は備前焼とみられる陶器碗の底部。回転台成形で底部外面に回転糸切り痕を残す。軟質の須恵質焼成で、内外面の一部に炭素付着。867は白磁碗の底部。高台内側の削り出しが浅い。外面残存部は露胎である。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ-1類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。868・869は青磁碗。868は口縁端部を1ヵ所凹みを入れるが輪花形になるかは不明である。内面にヘラ片彫によって2条の圓線と飛雲文を施文する。軸はわずかに白濁し、粗い貫入を伴う。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4b類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。869は体部外面に縦位の櫛描文、体部内面に櫛描文とヘラ片彫による施文がみられる。軸は黄色で透明度高く、全体的に薄く施軸する。大宰府分類の同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。

870・871は東播系の須恵質土器型鉢。ともに口縁の肥厚は未発達で、端部をわずかにつまみ上げるにとどまる。森田編年第Ⅰ期第2段階～第Ⅱ期第1段階に相当すると考えられ、11世紀末～12世紀後半の年代が与えられる。

872は紀伊型の土師質土器鈿付鍋。体部外面上位に断面三角形の低い凸帯状の鈿を貼り付ける。13世紀代と考えられる。873は瓦質土器羽釜。口縁端部は丸みを帯びるが、鈿端部は方形を保つ。鈿部貼付で、鈿下面に接して脚部が取り付く。炭素吸着・胎土ともに良好である。畿内山城地域周辺からの搬入品と考えられ、12世紀末～13世紀前半の年代が与えられる。874は土師質土器羽釜。口縁と鈿部は近接し、間に凹線状のくぼみをもって辛うじて区別される。鈿部は折り曲げ技法によって作り、口縁を雜ぎ足す。底部外面は大きめの格子タタキによって成形する。15世紀後半～16世紀代の年代が与えられる。

875は須恵質土器壺。器壁は厚く、体部外面に自然釉が付着する。古代に遡る可能性もある。876は陶器壺。外面に長格子主体の押印文を施し、暗黄色の自然釉が厚く付着する。産地は特定できない。877は陶器壺の体部下位。外面に押印文の可能性をもつ平行タタキを施す。内面には自然釉が厚く付着する。常滑焼または渥美焼の可能性が考えられる。878～880は土師質管状土鉢。

遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるものの12世紀後半～13世紀代と考えられる。

L=3.60m  
A



L=3.60m  
B

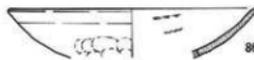
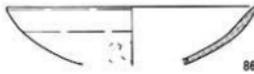
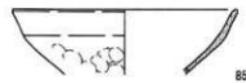
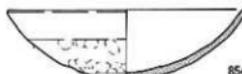
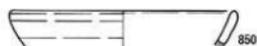
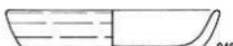
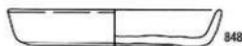
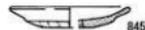
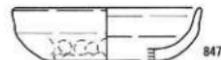


L=3.60m  
C

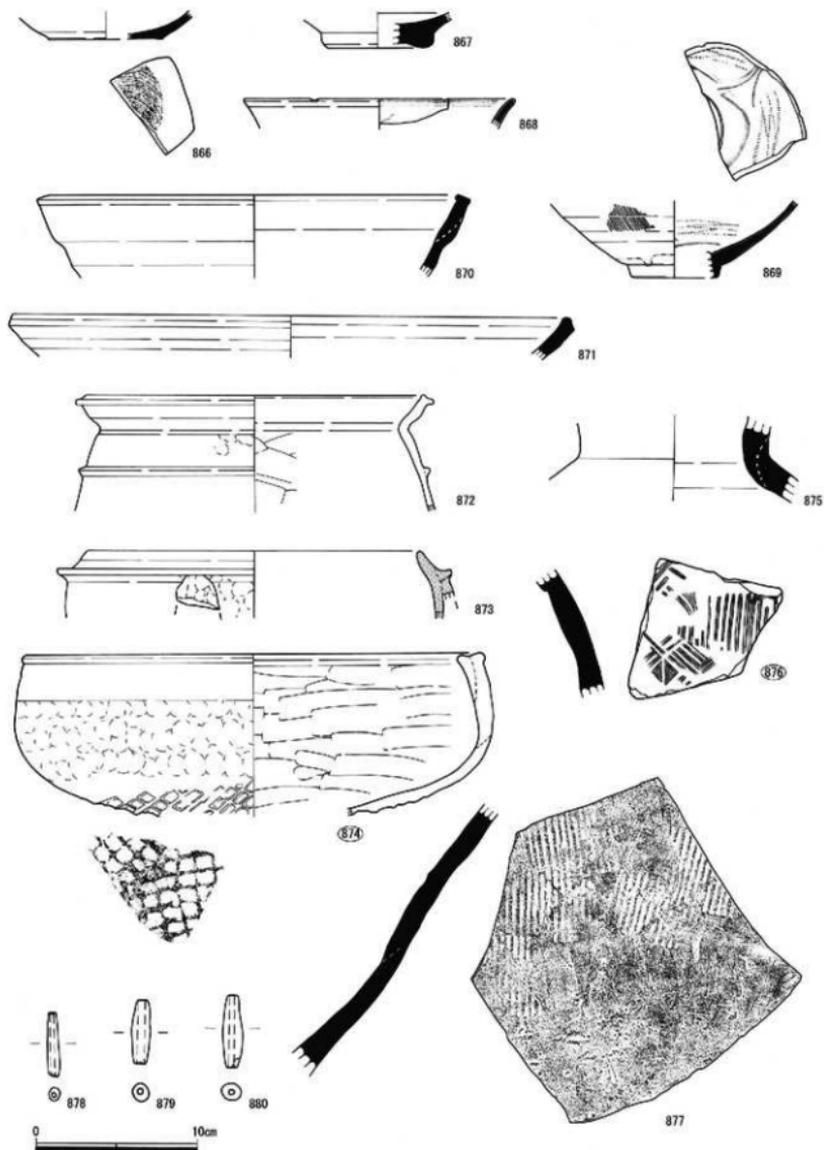


1. 黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり強・粘性弱)  
灰黄色粘質土ブロック多く含む
2. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり強・粘性弱)  
黄褐色シルトブロック含む

3. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性強)
4. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)  
黄褐色シルトブロック含む



第336図 I地区 SD1027遺構・遺物実測図(1)



第337图 I地区 SD1027遗物实测图(2)

溝28号 (I地区 SD1028) (第338~343図)

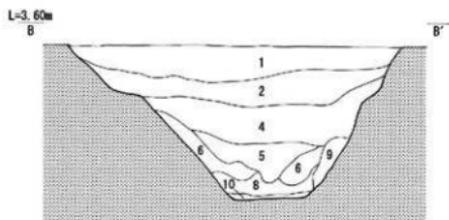
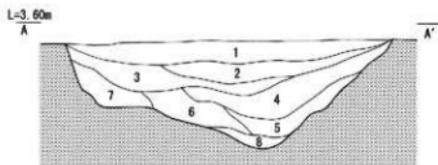
1-3・4・6・7区、f~q14~16グリッドに位置する、検出長53.4m幅310cm 深度124cmを測り、主軸はN9°Wを向く、直線的に延びる溝である。断面は深いレンズ状または逆台形状・梯形状で、埋土は10層に分層できる。底面は北から南に向けて下がる。SD1027と並行しており、2条の溝で屋敷地の区画を形成したと考えられる。

遺物は弥生土器片・甕、須恵器杯、土師質土器杯・杯 (回転糸切り・回転ヘラ切りほか)・皿 (回転糸切り・回転ヘラ切りほか)・鍋 (紀伊型ほか)・羽釜・把手 (瓢か)・土釜、瓦器碗・皿、瓦質土器杯・羽釜・捏鉢・甕、須恵質土器捏鉢・壺・甕・貯蔵具 (平行タタキ・格子タタキほか)、備前陶器甕・壺・播鉢、常滑焼陶器甕、青磁碗 (蓮弁文・龍泉窯系)、白磁碗、近世陶磁 (瀬戸美濃・肥前)、須恵質平瓦、鉄製品片・釘、鉄滓、滑石製温石か、砂岩製印石、被熱砂岩・片岩礫が出土。

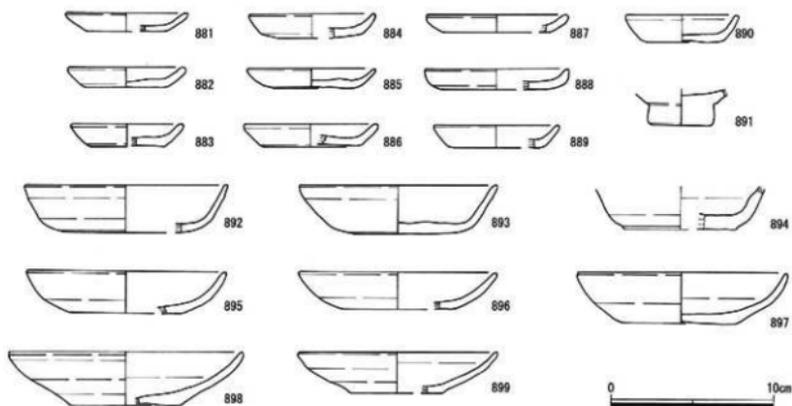
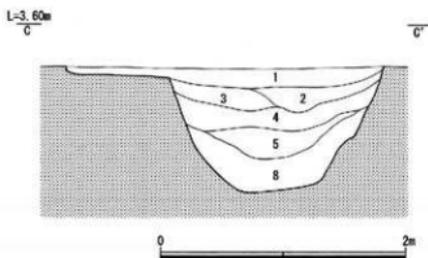
881~890は土師質土器皿。回転台成形で、881~887・890は底部外面に回転糸切り痕を残し、886・890は板目痕を伴う。胎土は、886にチャート含む。891は土師質土器柱状高台付皿。回転台成形で底部外面は回転糸切り痕を残す。胎土は良好で、チャートを含む。892~912は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面は892~899が回転糸切り痕を残し、909・910・912が回転ヘラ切り痕を残す。898・902・909に板目痕を伴う。胎土にチャートを含むのは893・901・903で、893は在地花崗岩も含む。回転糸切り痕を伴う個体は大きく開く体部をもち、回転ヘラ切り痕を伴う個体は体部の開きが小さい傾向がある。

913・914は瓦器皿。913は体部内面に横位のヘラミガキを施すが、914はヘラミガキが確認できない。炭素吸着は913が良好で、914がやや不良。和泉型瓦器Ⅲ-3~Ⅳ期に併行するとみられる。915~928は瓦器碗。915は体部内外面に横位のヘラミガキを施す。和泉型瓦器碗Ⅲ-1~2期と考えられる。916~919は口径13.8~14.6cmで、やや深みがある。917・918は体部内面に粗い横位のヘラミガキ、917は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。いずれも和泉型瓦器碗Ⅲ-3期に相当するとみられ、13世紀前葉の年代が与えられる。ただし919は口縁内面に1条の稜があり、和泉型としてはやや異形である。920~925は口径12.3~14.4cmを測り、器高はやや低平である。923・924は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。925は内面に連結輪状ヘラミガキ暗文を施すため紀伊型瓦器碗とみられる。いずれも和泉型瓦器碗Ⅳ-1期前後に相当するとみられ、13世紀中葉の年代が与えられる。926は酸化炎焼成気味で、器表面の一部がわずかに暗色化する。胎土は粗く、チャートや在地花崗岩とみられる粒子を含む。瓦器碗の模倣品と考えられる。927は瓦器碗底部。断面逆台形状の高台を貼り付ける。底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器碗Ⅲ-2~3期に相当し、12世紀末~13世紀前葉の年代が与えられる。928は口径11.8cmの小型品で、炭素吸着はみられない。和泉型瓦器碗Ⅳ-2~3期に下る可能性がある。929は瓦質土器杯か。底部外面は回転糸切り痕を残す。底部内外面に重焼に伴うとみられる剝離痕を有する。炭素吸着はやや不良である。

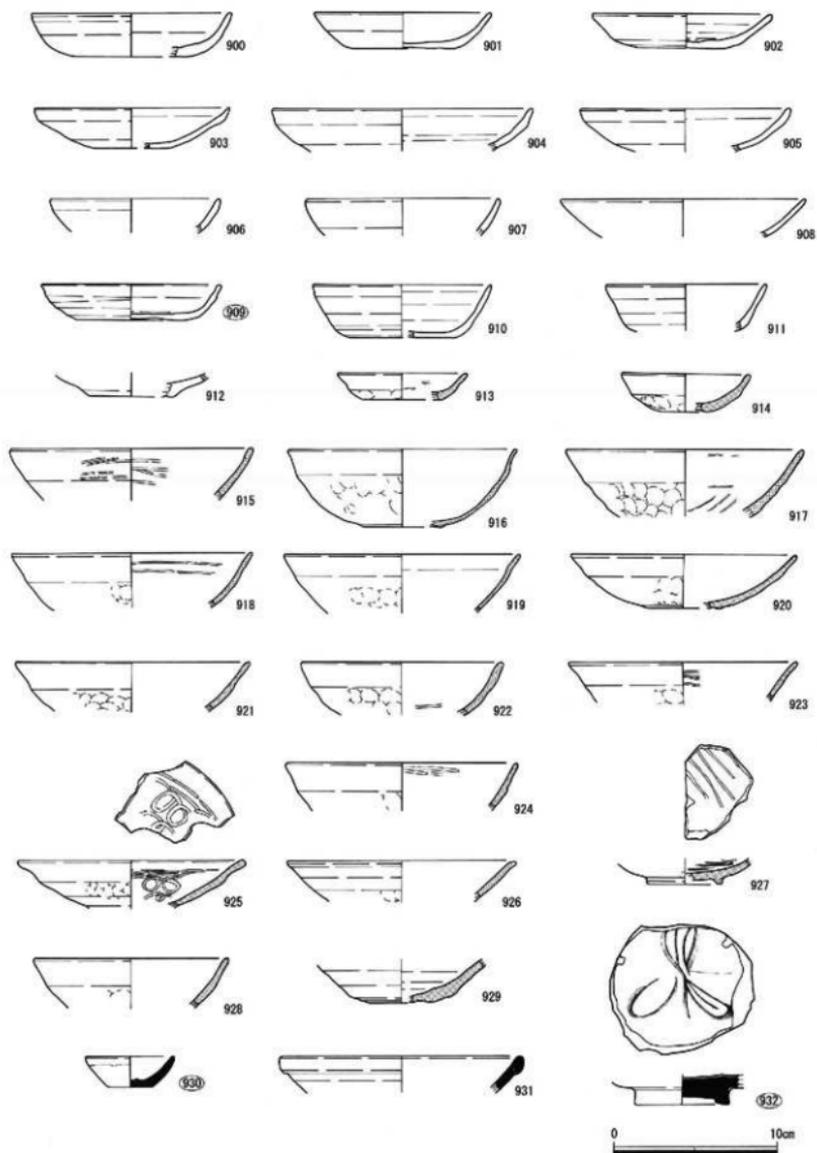
930は瀬戸美濃系とみられる陶器小杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。内面から口縁外面にかけて鉄釉を施す。素地は灰白色を呈する。931は白磁碗で、玉縁状の口縁をもつ。内外面に釉とびがみられる。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し、11世紀後半~12世紀前半の年代が与えられる。932は青磁碗。底部内面にヘラ片彫によって花文を施文する。釉は透明度高く、粗い貫入を伴う。高台皿付に及ぶ釉は掻き取る。破面との境部分は2カ所でエッジがつぶれており、スクレーパー的使用によるものと考えられる。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2b類に相当



1. オリーブ褐色2.5Y4/4粘質土(しまり強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性弱)
3. 黄褐色2.5Y5/4粘質土(しまり・粘性弱)
4. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり弱・粘性強)
5. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり・粘性強)
6. にぶい黄褐色10YR4/3粘質土(しまり・粘性強)
7. にぶい黄褐色10YR4/3粘質土(しまり強・粘性弱)
8. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり・粘性強)  
炭化物片多く含む
9. 褐色10YR4/4粘質土(しまり強・粘性弱)
10. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり・粘性強)



第338図 I地区 SD1028遺構・遺物実測図(1)



第339图 I地区 SD1028遗物实测图(2)

し、12世紀中葉～後半の年代が与えられる。

933は瓦質土器鉢鉢で、小片のため残存部で描目を確認できない。炭素吸着やや不良で、酸化炎焼成気味である。934・935は東播系の須恵質土器鉢鉢。口縁端部の肥厚は未発達である。934は口縁に重焼による炭素付着がみられる。935の体部内面下位は使用による剥離・磨耗が著しい。ともに森田編年第Ⅱ期第2段階に相当し、12世紀末～13世紀初頃の年代が与えられる。936・937は備前焼の陶器鉢鉢。936は口縁内外面に自然軸がわずかに付着し、体部外面上位に重焼痕を残す。重根編年IV B～2期に相当し、15世紀後葉の年代が与えられる。937は重根編年IV期後半～V期に相当し、15～16世紀代の年代が与えられる。

938は土師質土器鍋。厚い器壁をもち、口縁端部は方形に作る。胎土は粗く、金雲母を含む。12世紀代と考えられるが、古代末に遡る可能性もある。939は紀伊型の土師質土器鈔付鍋。口縁端部は内側に折り返す。体部は扁平、外面上位に断面三角形の低い凸帯状の鈔部を貼り付ける。胎土は粗く、結晶片岩を含む。13世紀後半～14世紀前半と考えられる。940は土師質土器鍋とみられる。紀伊型鈔付鍋もしくは古代末の土師器甕の可能性もある。941は紀伊型の土師質土器鈔付鍋。口縁端部の内側への折り返しは弱い。体部外面上位に断面三角形の低い凸帯状の鈔部を貼り付ける。胎土は粗く、チャート含む。13世紀代と考えられる。

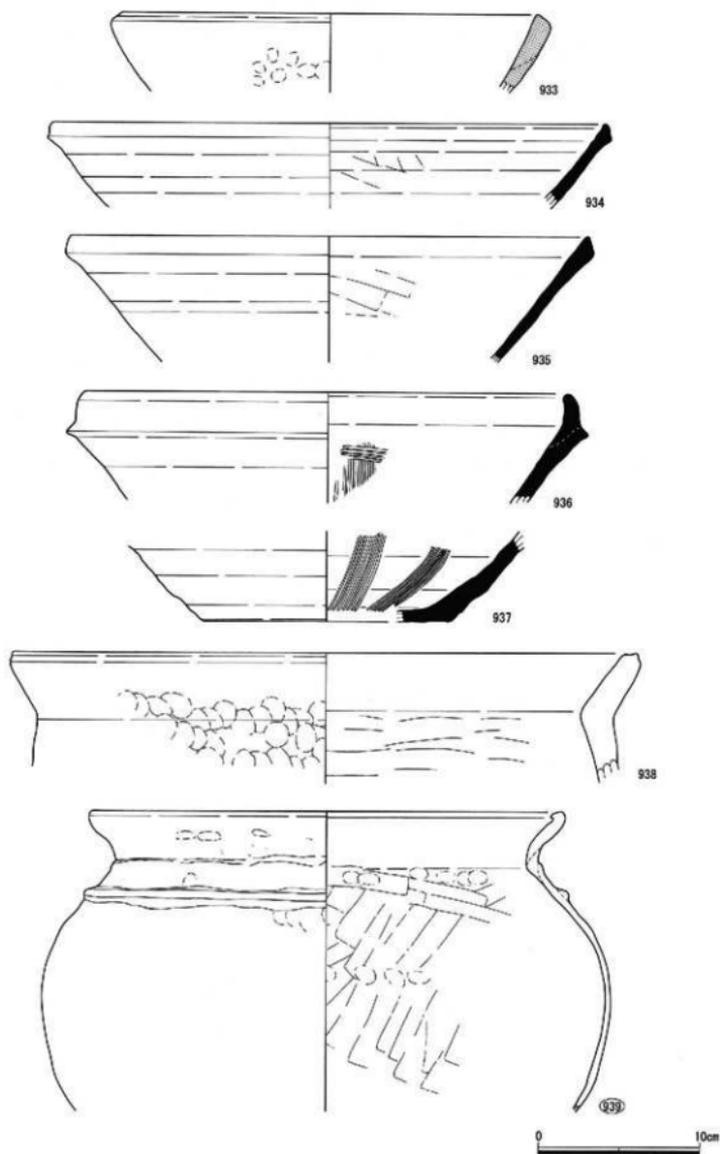
942は瓦質土器羽釜。口縁と鈔の端部は丸みを帯びる。鈔部は貼り付けによって作る。鈔部直下に脚部が取り付けが、鈔部とは接しない。炭素吸着は不良である。畿内山城地域周辺からの搬入品で、13世紀前半頃と考えられる。943は播磨型の土師質土器羽釜。口縁付近に断面三角形の鈔部を貼り付ける。体部外面は平行タタキ、内面はヨコハケを施す。長谷川編年V～VI期に相当し、15～16世紀代の年代が与えられる。944～947は土師質土器羽釜で、口縁と鈔部が近接し、ほぼ一体化するものである。鈔部はすべて折り曲げ技法で作る。944は体部外面上位～底部に格子タタキを施す。格子タタキの範囲がこれほど上がる例は珍しい。胎土に金雲母を含む。946は胎土に花崗岩を含む。ともに15～16世紀代と考えられる。948は須恵質土器壺。厚い器壁をもち、体部外面に平行タタキを施す。技法や形状から讃岐西村系とみられるが、同地の産かは不明である。949は須恵質土器甕。頸部外面に平行タタキの痕跡を残す。讃岐十瓶山系統とみられるが、同地の産であるかは不明である。950・951は常滑焼の陶器甕体部。外面に長格子押印文を施す。952は常滑焼か渥美焼の陶器甕片で、外面に格子状押印文を施し、自然軸が厚く付着する。953・954は備前焼とみられる陶器甕または甑の底部。954は胎土に花崗岩を含む。時期は不詳である。

955は土師質土器の把手。956～958は土師質管状土錘。959・960は須恵質の平瓦。959は凹面に布日痕、凸面に縄文を有し、胎土にチャート・泥岩とみられる粒子を含む。960は凹面に布日痕を有し、凸面は板ナデ・ナデによって調整される。

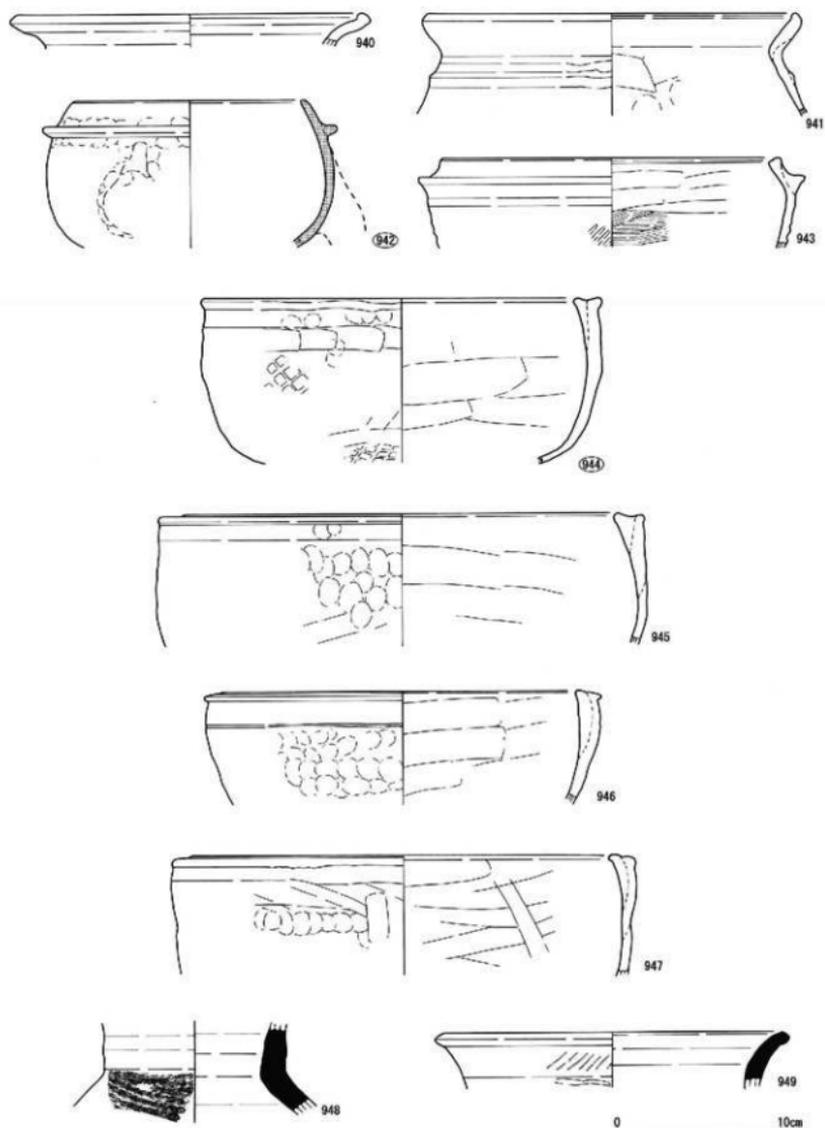
961は鉄釘とみられる。上部をほぼ直角に折り曲げる。

962は滑石製石鍋の体部片を転用し、幅約5cmの円形もしくは小判形に加工する。下半を欠損する。全体の形状と穿孔位置から、滑石であると推定される。径1～2mm深さ1mm程度の穿孔が凹面12ヵ所、凸面8ヵ所みられ、いずれも貫通しない。破面に径約5mmの貫通する穿孔痕跡がある。

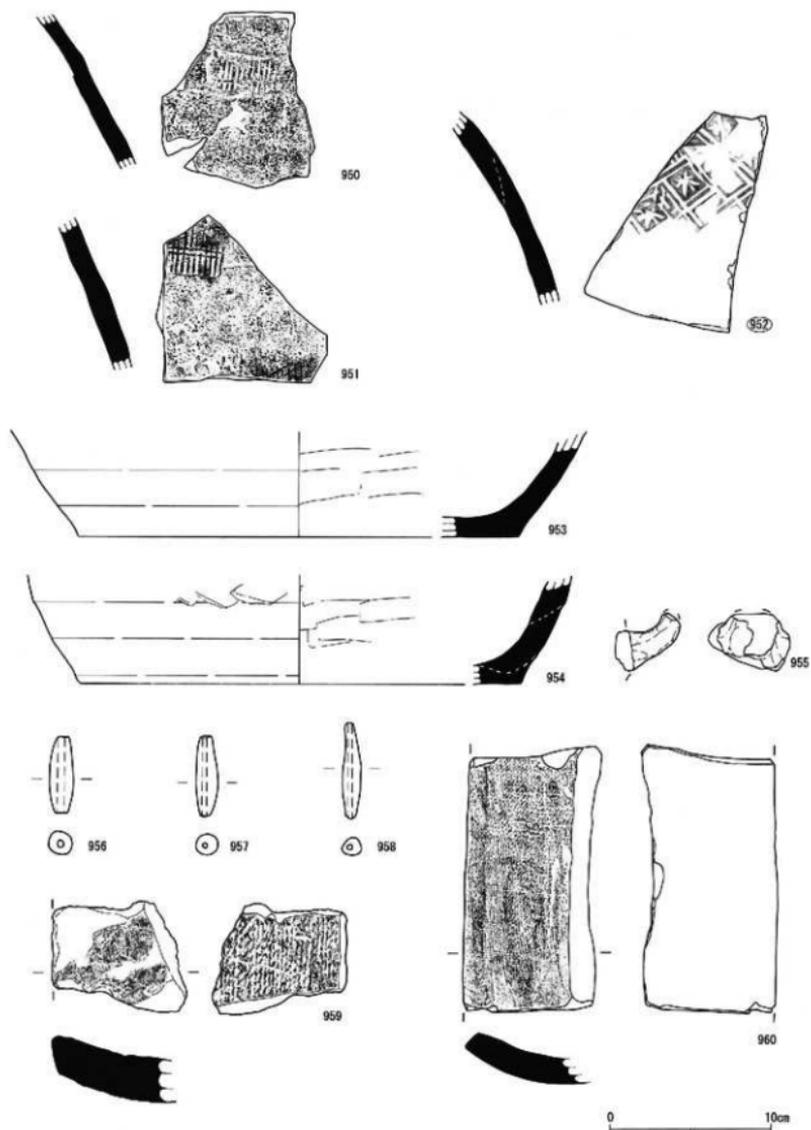
963～965は砂岩製砥石。963は2面を使用し、わずかに敲打痕が残る。964は2面を使用する。965は砥石の破片で、破面のエッジがやや緩いことから欠損後も若干使用したとみられる。966は砂岩製叩石で、下端面に敲打痕、側面の一部に擦痕がみられるが、使用感は薄い。



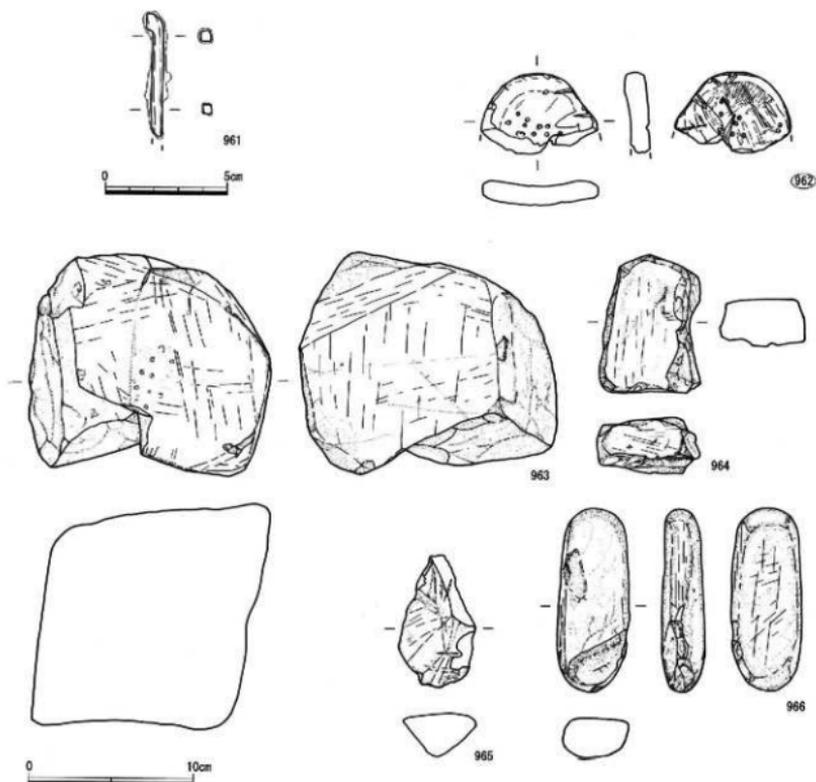
第340图 I地区 SD1028遗物实测图(3)



第341图 I地区SD1028遗物实测图(4)



第342图 I地区 SD1028遺物実測図(5)



第343図 I地区 SD1028遺物実測図(6)

出土遺物に時期幅があるものの、瓦器椀・瓦質羽釜・紀伊型銚付き甕・東播系須恵質土器捏鉢など、主体となる遺物の時期が12世紀末～13世紀代であることから、遺構の年代もこの時期を中心とすると考えられるが、やや古手の遺物も存在することから開始期が若干遡る可能性もある。また備前焼や土師質土器羽釜は15～16世紀代のもので、量的に少ないことから混入とと考えておく。

溝29号 (I地区 SD1029) (第344図)

I-3・4・5区東部、[~o12~16グリッドに位置する、検出長48.7m幅162cm 深度52cmを測り、主軸はN18°Wを向く、直線的に延びる溝である。断面はレンズ状または逆台形状・梯形状で、埋土は3層に分層できる。底面は北から南に向けて下がる。

遺物は弥生土器片か、須恵器供膳具・杯・甕、土師質土器片・鍋、瓦器椀、須恵質土器甕・貯蔵具

(格子タタキ)、陶器甕(常滑か瀬美)、白磁碗、瓦片、鉄滓が出土。967は紀伊型の土師質土器鈔付鍋。口縁端部は内側にわずかに折り返す。頸部外面は強いヨコナデにより凹線状に作る。体部外面上位に鈔部の剝離痕がある。胎土に結晶片岩や泥岩とみられる粒子を含む。13世紀代と考えられる。遺構の年代は出土遺物から13世紀代と考えられる。

#### 溝30号 (I地区 SD1030) (第345図)

I-3区西端北側、f10・11グリッドに位置する、全長1.5m幅31cm 深度6cmを測り、主軸はN31°Wを向く。断面は浅いレンズ状で、埋土は1層である。きわめて短小で、鋤溝の可能性もある。出土遺物は1点のみで、968は須恵質土器甕。体部外面は格子タタキを板ナデによって消す。内面に自然釉が付着する。十瓶山系とみられるが、産地は不明である。十瓶山の編年に照らすと佐藤編年IV-1~2段階に相当し、11世紀中葉~12世紀前葉頃と考えられる。

#### 溝38号 (I地区 SD1038) (第346図)

I-3区南西隅、d・e12グリッドに位置する、検出長5.4m幅136cm 深度26cmを測り、北から南西方向へカーブする。断面は逆台状で、埋土は3層に分層できる。

遺物は土師質土器片・羽釜・甕、瓦器椀、瓦質土器羽釜、須恵質土器貯蔵具、鉄製品片、被熱砂岩甕が出土。969は瓦質土器羽釜。口縁・鈔の端部は方形に作る。脚部は鈔の下面に接して貼りつける。炭素吸着やや不良である。畿内山城地域からの搬入品で、12世紀末~13世紀前半の年代が与えられる。970は瓦質土器煮炊具の脚部。炭素吸着はやや不良である。969と胎土が似ていることから、同個体であった可能性がある。遺構の年代は、出土遺物から12世紀末~13世紀前半と考えられる。

#### 溝44号 (I地区 SD1044) (第347図)

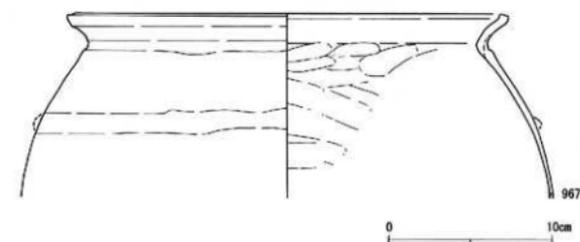
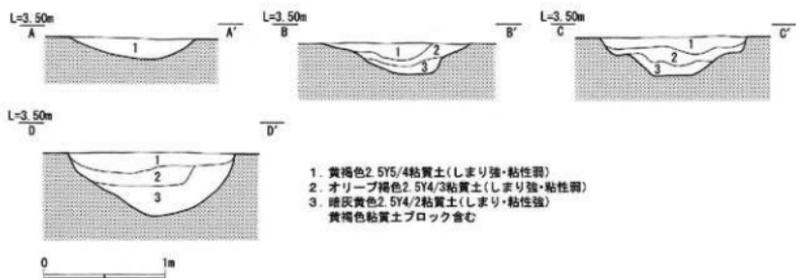
I-6区東端北側、q・r16グリッドに位置する、検出長6.5m幅110cm 深度18cmを測り、主軸はN0°WEを向く。SD1045に切られ、以北には延びない。断面は浅い逆台形状で、埋土は3層に分層できる。

遺物は土師質土器片・杯・皿(回転糸切り)・鍋・土鏝、瓦器椀、須恵質土器貯蔵具、白磁碗(玉縁)、青磁片、陶器片、瓦片、焼土ブロック、炭化物片が出土。971は土師質土器皿、972・973は土師質土器杯で、ともに回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。971・973は板日痕を伴う。胎土は、971はチャートを、973はチャートと石灰岩とみられる粒子を含む。974は瓦器椀。口径15.0cmを測る。炭素吸着はみられず、酸化炎焼成される。二次的な被熱によるカーボン消失の可能性がある。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期とみられ、13世紀前葉の年代が与えられる。975・976は土師質管状土鏝。

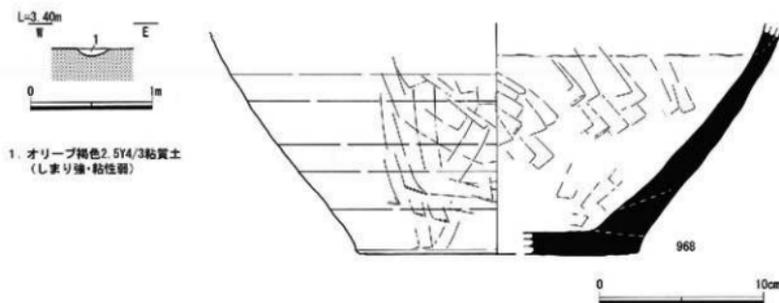
遺構の年代は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

#### 溝45号 (I地区 SD1045) (第348図)

I-6区北東隅、r16グリッドに位置する、検出長2.2m幅65cm 深度14cmを測り、主軸はN43°Wを向く。両端は調査区外に延びるが、延長上にあるI-8区では検出していない。断面は浅いレンズ状で、埋土は2層。遺物は土師質土器片・羽釜、瓦器椀、須恵質土器貯蔵具、滑石製石鍋が出土。977は滑石製石鍋。内外面に成型時のケズリ痕を残す。外面に煤が付着し、鈔部以下は炭化物が固着。木戸分類Ⅲ-a類に相当し、12世紀代の年代が与えられる。



第344図 I地区 SD1029遺構・遺物実測図

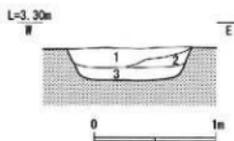


第345図 I地区 SD1030遺構・遺物実測図

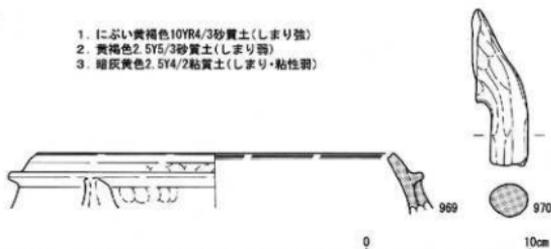
溝48号 (I地区 SD1048) (第349図)

I-7区西部南側、g~k17グリッドに位置し、南は調査区に延びる。検出長17.9m幅81cm 深度28cmを測り、主軸はN10°Wを向く、直線的に延びる溝である。SD1027・1028と並行する。断面はレンズ状または逆台形状で、埋土は3層に分層できる。底面は北から南に向けて下がる。

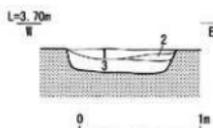
遺物は弥生土器高杯か、土師質土器杯・皿(回転糸切り・回転ヘラ切りか)・鍋・羽釜・播鉢、瓦器碗、瓦質捏鉢か播鉢、須恵質土器貯蔵具(平行タタキ)、白磁碗(玉縁)、鉄釘、鉄滓が出土。978~980は



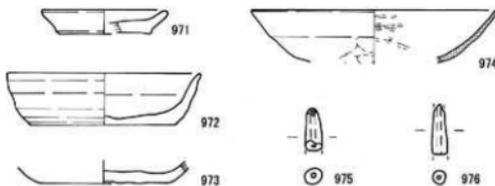
1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(しまり強)
2. 黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり弱)
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性弱)



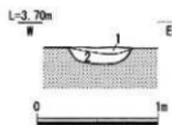
第346図 I地区 SD1038遺構・遺物実測図



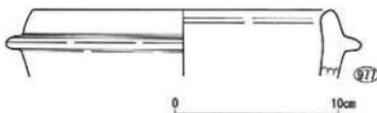
1. 暗褐色10YR3/4砂質土(しまり強)
2. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり・粘性弱)
3. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり・粘性弱)



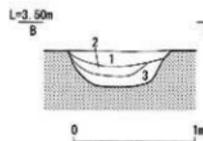
第347図 I地区 SD1044遺構・遺物実測図



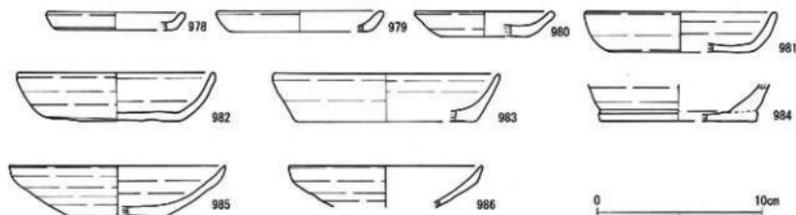
1. 暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり弱)



第348図 I地区 SD1045遺構・遺物実測図



1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり弱)
2. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり・粘性弱)
3. 暗褐色10YR3/3粘質土(しまり弱・粘性強)



第349図 I地区 SD1048遺構・遺物実測図

土師質土器皿。978は非回転台成形の可能性がある。979・980は回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。980は胎土にチャートを含む。981は非回転台成形とみられる土師質土器杯。982～986は回転台成形の土師質土器杯で、982～985は底部外面に回転糸切り痕を残し、982・984は板目痕を伴う。984は、断面観察によって底底部の境に接合痕が確認できる。胎土は、982にチャートと砂岩、985にチャートとみられる粒子を含む。遺構の年代は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

#### 溝49号 (I地区 SD1049) (第350図)

I-7区西部南側、j・k17～19グリッドに位置する、全長10.4m幅124cm 深度24cmを測り、主軸はN85°Eを向く。断面は不整な逆台形状で、埋土は2層に分層できる。SA1027・SG1009と近似する主軸方位をもつことから、SA1027の北側を区画したものと考えられる。

遺物は弥生土器鉢か、須恵器片・杯・蓋、土師質土器片・杯(手捏ね)・皿・鍋・土鉢、瓦器碗、瓦質土器別釜、須恵質土器貯蔵具、青磁皿、鉄釘、鉄滓が出土。987は瓦器碗。口径14.5cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器碗のⅢ-3期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。988は鉄釘。頂部は扁平にしたのち折り曲げて頭部を作る。遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるものの、概ね12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

#### 溝52号 (I地区 SD1052) (第351・352図)

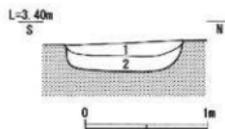
I-7区東部中央、m2・3グリッドに位置し、東は調査区外に延びる。検出長4.7m幅112cm 深度30cmを測り、主軸はN85°Eを向く。断面は逆台形状で、埋土は3層に分層できる。SA1035のほぼ直交する主軸方位をもつ建物が付近に存在することから、区画に関わる溝と考えられる。

遺物は須恵器甕、土師質土器片・杯・皿(回転糸切り)・土鉢、瓦器碗・皿、瓦質鍋、須恵質土器掬鉢・甕・貯蔵具、備前陶器片、白磁碗(玉縁)、青磁碗(同安窯系・龍泉窯系)・壺か、鉄滓、砂岩製卵石、焼土ブロックが出土。

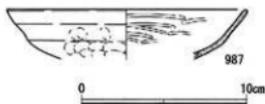
989～992は土師質土器皿。回転台成形で、990～992は底部外面に回転糸切り痕を残す。993は土師質土器杯で、底部外面に回転糸切り痕を残す。994・995は瓦器皿。994は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。ともに炭素吸着やや不良。和泉型瓦器Ⅲ-3～Ⅳ期に併行する時期と考えられる。996～1001は瓦器碗。口径は13.7～15.8cmで、体部内面にのみ粗い横位のヘラミガキを施す。998・999は体部外面に粘土接合痕がみられる。炭素吸着は997・998が良好、999・1001は伏焼によるものか外面良好・内面不良。996がやや不良で、口縁に重焼痕を伴う。1000を除き和泉型瓦器碗Ⅲ-3期に相当するとみられ、13世紀前葉の年代が与えられる。1000は底部内面にランダムな連続輪状ヘラミガキ暗文を施すため、紀伊型瓦器碗と考えられ、和泉型瓦器Ⅲ-3～Ⅳ-1期に併行すると考えられる。

1002は白磁碗。玉縁状口縁をもつ。釉はやや黄みがかり、貫入を伴う。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1003は青磁碗。体部外面にヘラ片彫による鋸歯弁文を施す。釉は貫入を伴い、高台外面の途中まで施釉する。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類なら13世紀初頭～前半の時期であるが、見込みに印花文を伴えばⅠ-5c類となり13世紀中頃～14世紀初頭の年代が与えられる。

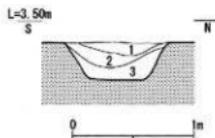
1004は東播系の須恵質土器掬鉢。体部内面下位は使用による磨耗する。森田編年第二期第1～2段階に相当し、12世紀中葉～13世紀初頭の年代が与えられる。



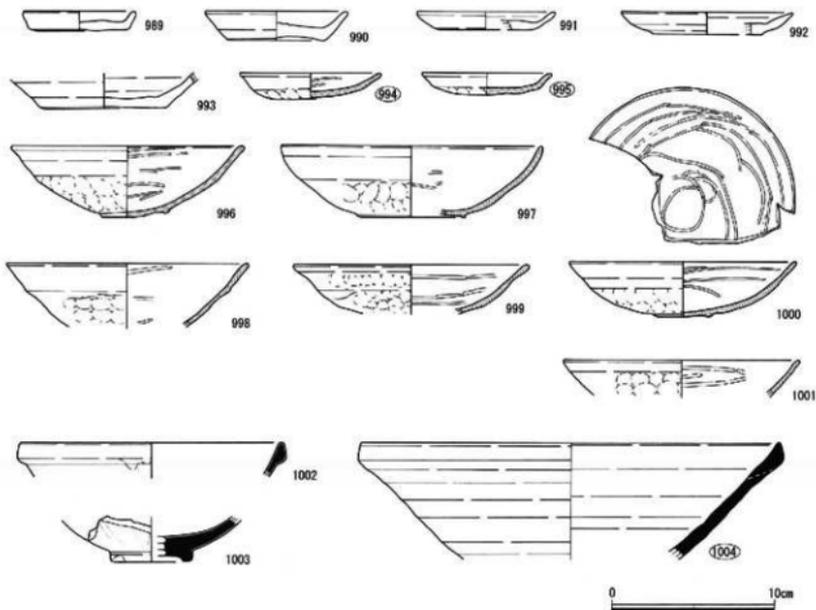
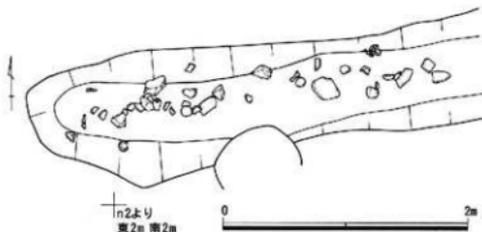
1. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり弱)
2. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり・粘性強)



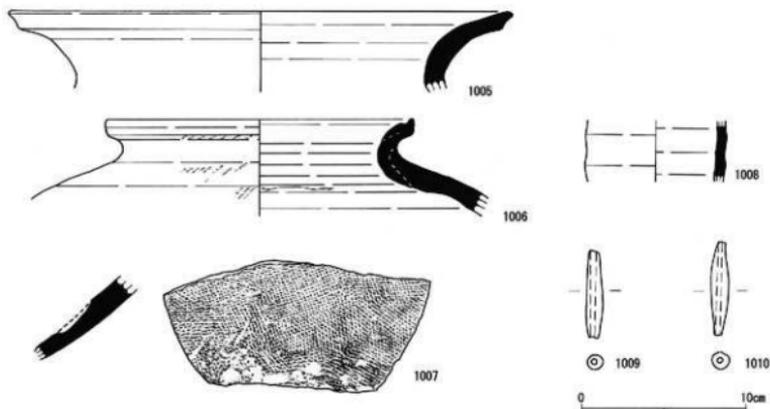
第350図 I地区 SD1049遺構・遺物実測図



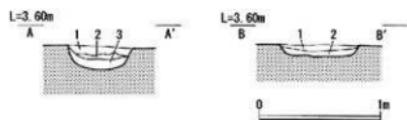
1. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)
2. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり弱)
3. オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性強)



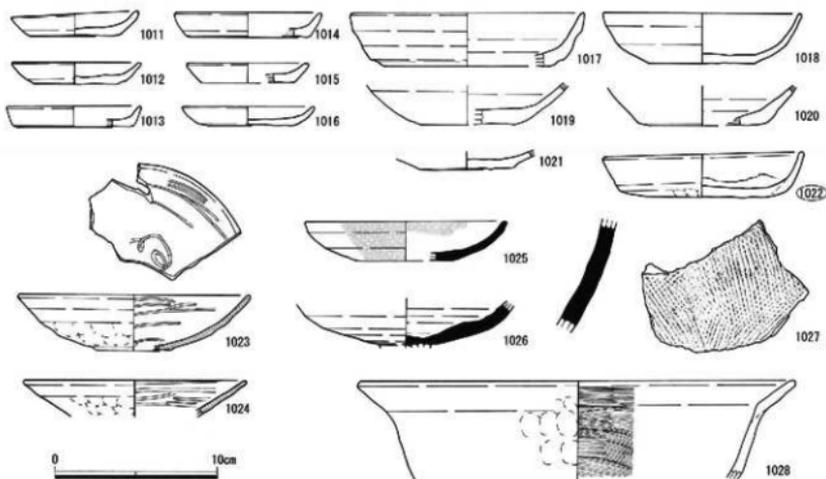
第351図 I地区 SD1052遺構・遺物実測図(1)



第352図 I地区 SD1052遺物実測図(2)



1. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)
2. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(しまり弱)
3. 灰黄褐色10YR4/2粘質土(しまり・粘性弱)



第353図 I地区 SD1055遺構・遺物実測図

1005は須恵器甕。口縁内面と体部外面に自然釉が付着する。平安時代前半期の可能性がある。1006は須恵質土器甕。外面に平行タタキのちヨコナデを施す。束播系とみられ、森田編年第一期第2段階に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1007は須恵質土器甕の体部下半。外面は細かい平行タタキが明瞭である。胎土に泥岩とみられる粒子を含む。酸化炎焼成気味である。束播系の可能性がある。1008は青磁とみられ、頸部の可能性がある。胎土は精良であるが、須恵質焼成で黒褐色の含有物が目立つ。内外面に施釉するが、内面は極めて薄い。産地・時期は不明である。

1009・1010は土師質管状土甕。ともに細身である。

遺構の年代は、12世紀前半までの遺物を含むものの概ね13世紀代と考えられる。

#### 溝55号 (I地区 SD1055) (第353図)

I-8・10区北部、t・a18～4グリッドに位置する。検出長28.4m幅92cm深度19cmを測り、主軸はN85°Eを向く、直線的に延びる溝である。SD1056と並行する。西はSX1008に、東はSD1059にそれぞれ切れられ、先へは延びない。断面はレンズ状または逆台形状で、埋土は3層に分層できる。底面は西に向けて下がる。

遺物は須恵器高杯・甕(平行タタキ)、土師質土器片・杯・皿(回転系切り)・鍋・摺鉢、瓦器椀・皿、須恵質土器壺鉢、備前陶器碗が、白磁片、青磁片、炭化物片が出た。

1011～1015は回転台成形の土師質土器皿。1015を除き底部外面に回転系切り痕を残す。胎土は1012に砂岩、1015にチャートを含む。1016は非回転台成形の土師質土器皿。1017～1021は回転台成形の土師質土器杯。底部外面に回転系切り痕を残す。1021は板目痕を伴う。胎土は1019にチャートとみられる粒子を含む。1022は非回転台成形の土師質土器杯。底部外面に指頭圧痕を残す。金雲母は含まない。京都系土師器皿Dタイプの模倣品と考えられ、13世紀代の年代が与えられる。

1023・1024は瓦器椀。口径は13.6～14.0cmで、器高は低く、体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。1023は底部内面に連結輪状のヘラミガキ暗文を施し、炭素吸着やや不良で酸化炎焼成気味である。紀伊型瓦器椀とみられ、和泉型瓦器Ⅲ-3期併行と考えられる。1024は重焼によって口縁のみ炭素の吸着がみられる。和泉型瓦器椀Ⅳ-1期に相当し、13世紀中葉の年代が与えられる。

1025は備前焼と考えられる陶器碗。回転台成形で、底部外面に回転系切り痕を残す。口縁内面～体部外面の一部に炭素が付着する。内面に重焼痕がみられる。1026は須恵器高杯の杯部。1027は須恵器甕。外面に平行タタキ、内面に同心円状当具痕を残す。1028は土師質土器鍋。内面は細かいハケ調整が施され、頸部内面に鋭い稜をつくる。外面に煤が付着する。

遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるが、概ね13世紀代と考えられる。

#### 溝56号 (I地区 SD1056) (第354～359図)

I-8・9・10区北部、a～c17～10グリッドに位置する。検出長64.7m幅244cm深度97cmを測り、主軸はN85°Eを向く。断面は逆台形状または梯形状で、埋土は7層に分層できる。底面は東に向けて下がる。ほぼ直線的に延びるが、I-10区でやや北側に張り出す。西は調査区外に、東はII地区に向けて延び、II地区SD1002につながるものと考えられる。

遺物は弥生土器壺、土師器把手(甌か)、須恵器杯、土師質土器片・椀・杯・皿(回転系切り)・鍋(鍔付ほか)・羽釜・摺鉢、貯蔵具・土甕、瓦器椀・皿、瓦質土器鍋・羽釜・甕、須恵質土器椀・壺鉢・

襖鉢・壺・甕・貯蔵具（平行タタキ）、備前陶器片、常滑陶器甕、不明陶器片、白磁皿・碗（玉縁ほか）、青磁片・碗（同安窯系・龍泉窯系）、青白磁碗、瀬戸美濃系近世陶磁片、瓦片（瓦質・須恵質）、不明土製品、鉄釘、鉄滓、砂岩製砥石、粘板岩製硯、砂岩製叩石、被熱凝灰岩礫が出土。

1029～1034は回転台成形の土師質土器皿。底部外面に回転糸切り痕を残す。1035は非回転台成形の土師質土器皿で、底部外面に指頭圧痕を残す。金雲母は含まない。京都系土師器皿Dタイプの模倣品と考えられ、13世紀代の年代が与えられる。1036～1043は土師質土器杯。回転台成形で底部外面に回転糸切り痕を残し、1038・1042・1043は板日痕を伴う。1044は土師質土器または土師器の高台付碗か杯または皿。回転台成形で、高台は貼付である。古代末期の可能性ある。

1045～1049は瓦器皿。1049を除き体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。1045は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は1045・1047・1049が良好で、他はやや不良である。1047は底部内面に焼成に伴う底状の剥離がみられる。1045が和泉型瓦器皿Ⅲ-3期併行、1046～1049はIV期に併行する時期と考えられる。

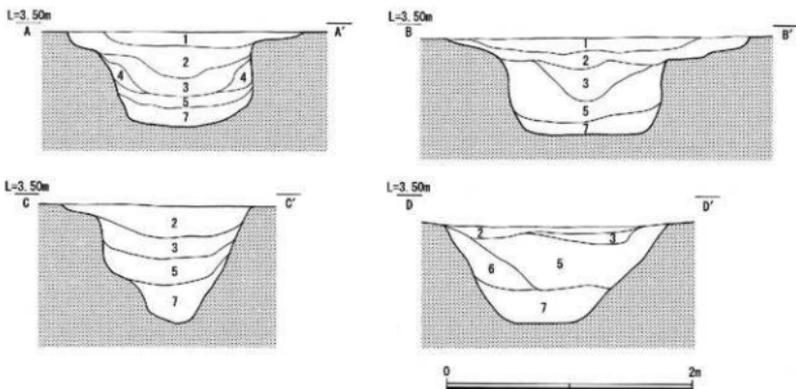
1050～1069は瓦器碗。1050～1053は体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器碗Ⅲ-2期に相当し、12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。

1054～1064は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。底部内面には、1061・1062は連結輪状、1063・1064は平行のヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は、1056・1058が良好で、やや不良・不良は1055・1057・1059・1061～1064である。1054は重焼により外面～口縁内面まで良好である。炭素吸着が全くみられないものは1060である。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期に属するものは1054・1057・1060・1063・1064で、IV-1～2期は1055・1056・1058・1059である。1061・1062は連結輪状暗文を施すことから紀伊型瓦器碗の可能性があり、和泉型瓦器IV-1期併行と考えられる。1065～1068は磨耗によって体部内面のヘラミガキが確認できないものである。1068は底部内面にヘラミガキ暗文の痕跡がある。和泉型瓦器碗IV-1～2期に相当する。1069は口縁端部を尖らせ、内側に1条の凹線を伴うことから楠葉型瓦器碗と考えられる。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は体部外面良好で、口縁～内面は不良である。重焼によるとみられる。楠葉型瓦器碗Ⅲ-2期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。

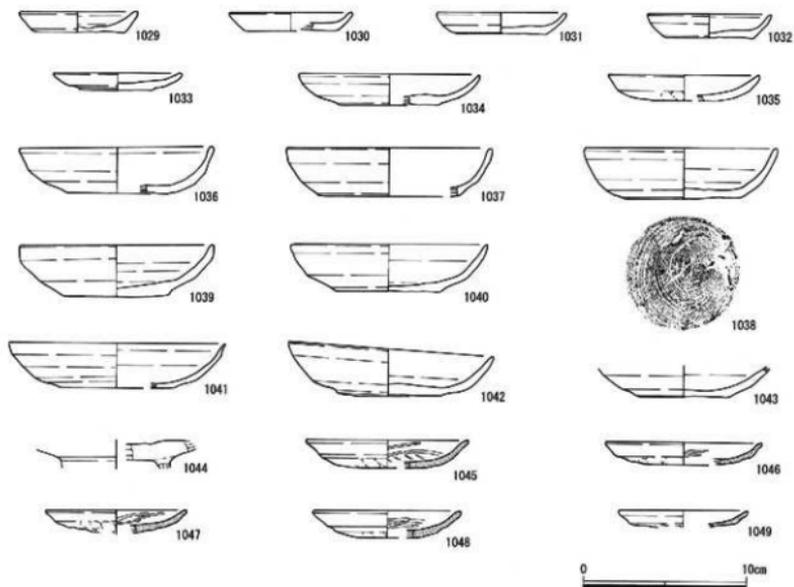
1070は東播系とみられる須恵質土器碗。回転台成形で底部外面に回転糸切り痕を残す。

1071は端反りの白磁皿口縁部。外面に軸とびを伴う。森田編年の白磁皿E群に相当するとみられ、16世紀代の年代が与えられる。1072は白磁皿の底部。底部外面は露胎である。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁皿V類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。

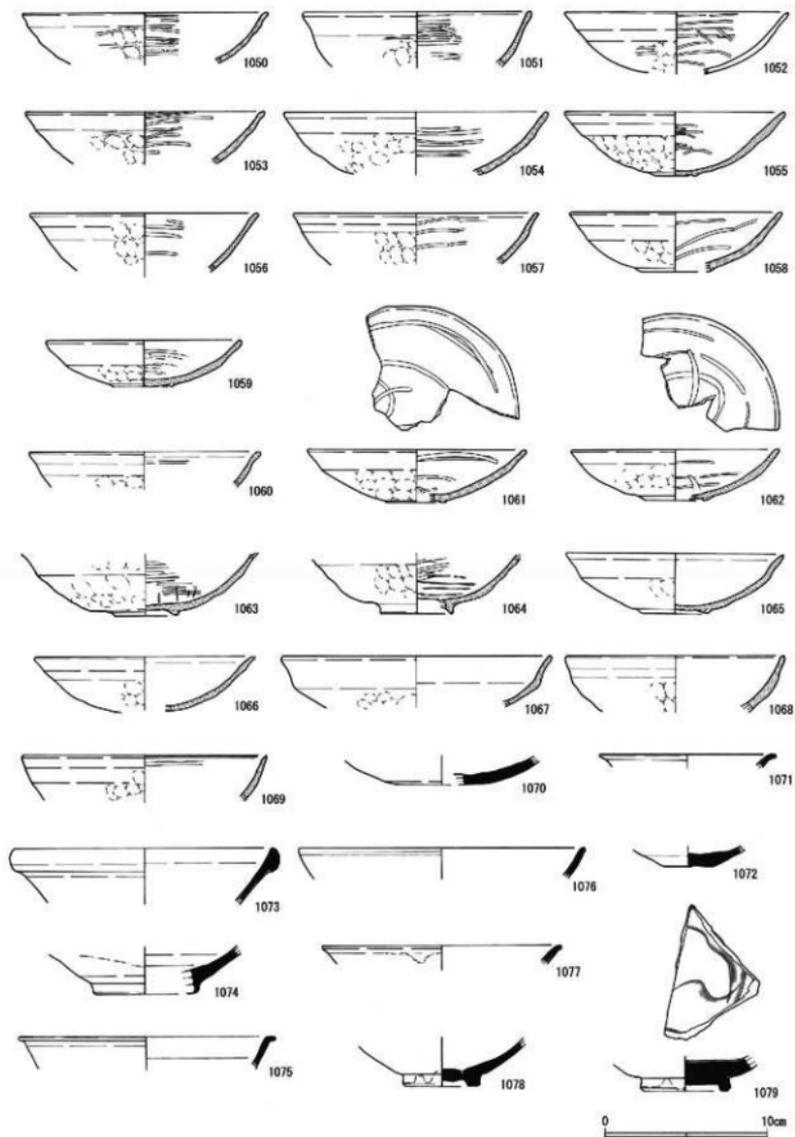
1073～1077は白磁碗。1073は玉縁状口縁をもち、胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗IV類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1074は体部外面の途中まで施釉され、以下露胎である。胎土に微細な黒斑を含む。胎土・軸ともに粗めで、軸とびを伴う。大宰府分類の白磁碗IV-1 a類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1075は口縁端部が外側に短く屈曲する。胎土は暗灰色を呈する。化粧土を塗布し、多くの軸とびを伴う。大宰府分類の白磁碗V類に相当するとみられ、12世紀中葉～13世紀前半の年代が与えられる。1076は口縁外面に1条の沈線を引き、化粧土を塗布し、軸は透明度高く貫入を伴う。大宰府分類の白磁碗V-1類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1077は口縁端部がわずかに外反する。胎土は肌理細かく、軸は鮮やかな白色を呈する。大宰府分類の白磁碗V類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。



1. にぶい黄褐色10YR4/3粘質土(しまり強・粘性弱)
2. にぶい黄褐色10YR5/3粘質土(しまり強・粘性弱)
3. 黄褐色2.5Y5/3粘質土(しまり強・粘性弱)
4. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり強・粘性弱)  
シルト多く含む
5. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり強・粘性弱)
6. 暗褐色10YR3/3粘質土(しまり・粘性強)
7. 黒褐色2.5Y3/2粘質土(しまり弱・粘性強)



第354図 I地区 SD1056遺構・遺物実測図(1)



第355图 I地区 SD1056遺物実測図(2)

1078は青白磁碗。釉は粗い貫入を伴い、高台外面途中まで施釉される。胎土に微細な黒斑を含む。産地・時期ともに不明である。

1079は青磁碗。底部内面にヘラ片彫による草花文を施文する。釉は壘付を越えて高台内側に達する。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。

1080～1086は東播系の須恵質土器鉢。1080は口縁を方形に作るだけで肥厚させない。外面にわずかながら自然釉が付着する。森田編年第一期第2段階に相当し、11世紀末～12世紀前半の年代が与えられる。1081～1084は口縁端部を内側に拡張する。1081を除き、口縁端部に重焼による炭素が付着する。1081・1082は森田編年第二期第1段階に相当し、12世紀中葉～後半の年代が与えられ、1083・1084は第二期、12世紀中葉～13世紀初頭の年代が与えられる。1085・1086は底部外面に回転糸切り痕を残す。内面は使用によって磨耗する。

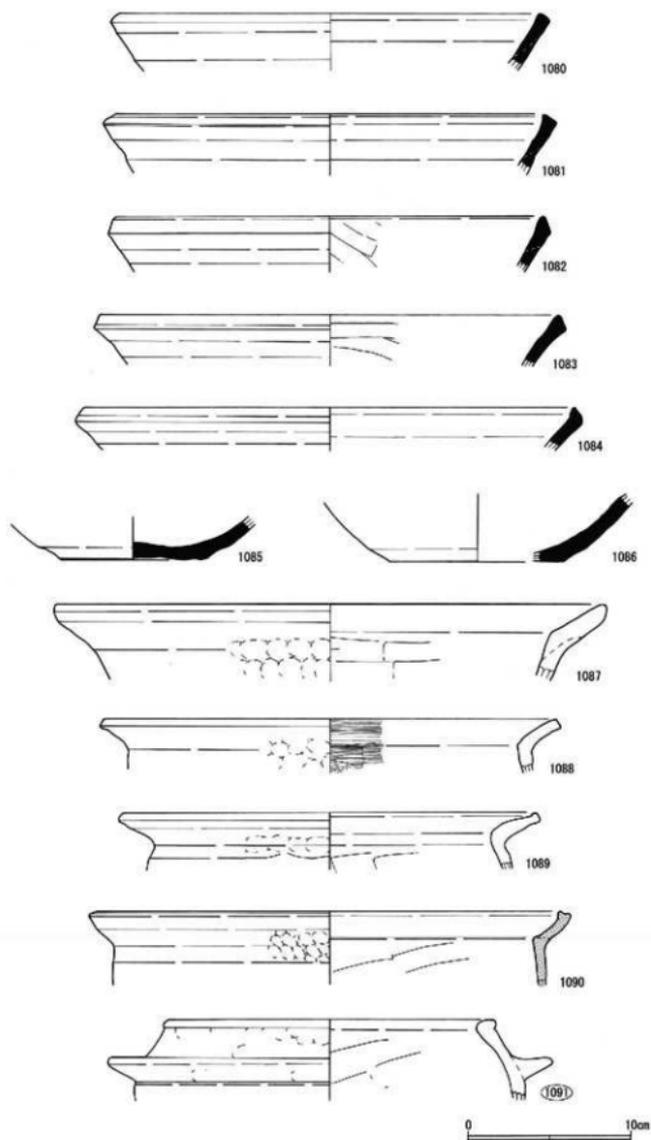
1087～1089は土師質土器鍋。1087は厚手の作りで、胎土に金雲母・角閃石・花崗岩を含む。瀬戸内沿岸～大阪湾岸の花崗岩地帯からの搬入品と考えられる。古代末に遡る可能性がある。1088は内面に細かいハケ調整を施す。胎土にチャートを含むため在地産の可能性もある。1089は紀伊型の鈔付鍋と考えられる。口縁端部をわずかに内側に拡張し、頸部外面は強いヨコナデによって凹線状に作る。胎土は粗い。13世紀代とみられる。

1090は瓦質土器鍋。受口状口縁をもつ。炭素吸着は外面不良、内面良好である。畿内山城地域からの搬入品で、13世紀代の年代が与えられる。1091は土師質土器羽釜。口縁端部は外方にわずかに拡張し比較的長い鈔部を貼り付ける。奥井分類の河内Ⅰ型（菅原分類河内A型）の羽釜とみられ、口縁の形状から13世紀後葉の年代とみられる。

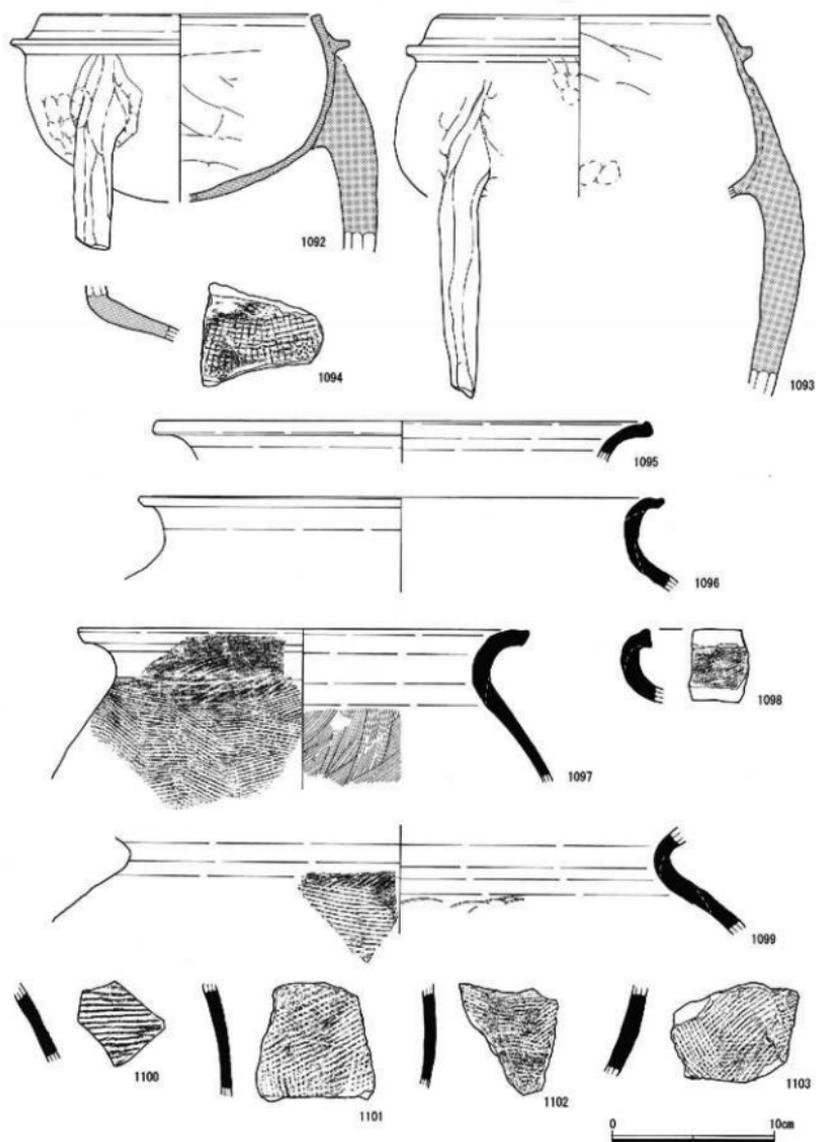
1092・1093は瓦質土器三足羽釜。1092は口縁と鈔の端部を方形につくる。1093は口縁端部を尖り気味に作ることから、1092より若干新しい要素をもつといえる。脚部は鈔の直下に取り付くが、鈔に接することはない。1093は脚部下位が内側に傾くが、復元傾を口縁に合わせたためである。畿内山城地域からの搬入品で、13世紀中葉の年代が与えられる。1094は瓦質土器甕。外面に格子タタキ、内面は同心円状当具痕をヨコハケによって消す。炭素吸着は良好である。亀山焼系瓦質土器と考えられ、14世紀代の年代が与えられる。

1095～1105は須恵質土器甕。1095は産地不明、1096は外面に平行タタキの痕跡がみられる。内面は酸化炎焼成される。東播系で、森田編年第一期第2段階に相当するとみられ、11世紀末～12世紀前半の年代が与えられる。1097は頸部～体部外面に平行タタキ、体部内面はタテハケを施す。東播系の一種とみられる。1098・1099も頸部～体部外面に細かい平行タタキを施し、1099は体部内面に同心無文当具痕を残す。ともに東播系とみられ、12世紀代の年代が与えられる。1100～1103は体部片で、外面に細かい平行タタキを施すことから東播系と考えられる。1101は外面炭素付着、1102は内外面に炭素付着がみられ、ともに酸化炎焼成気味である。1104・1105は外面に格子タタキを施し、内面に当具痕を残す。ともに古代の須恵器の可能性もある。

1106～1114は常滑焼とみられる陶器甕。1106は中野編年1a～b型式に相当し、12世紀前半の年代が与えられる。1107は1b～4型式で12世紀中頃～13世紀前半とみられる。1108～1114は外面に長格子の押印文を施す。1115は内外面とも調整粗く、灰釉または自然釉が掛かり、細かい貫入を伴う。蹄胎部は黒色化する。産地等は不明である。1116は須恵質土器壺。形態から西村系とみられるが、西村産かは不明。12世紀代か。

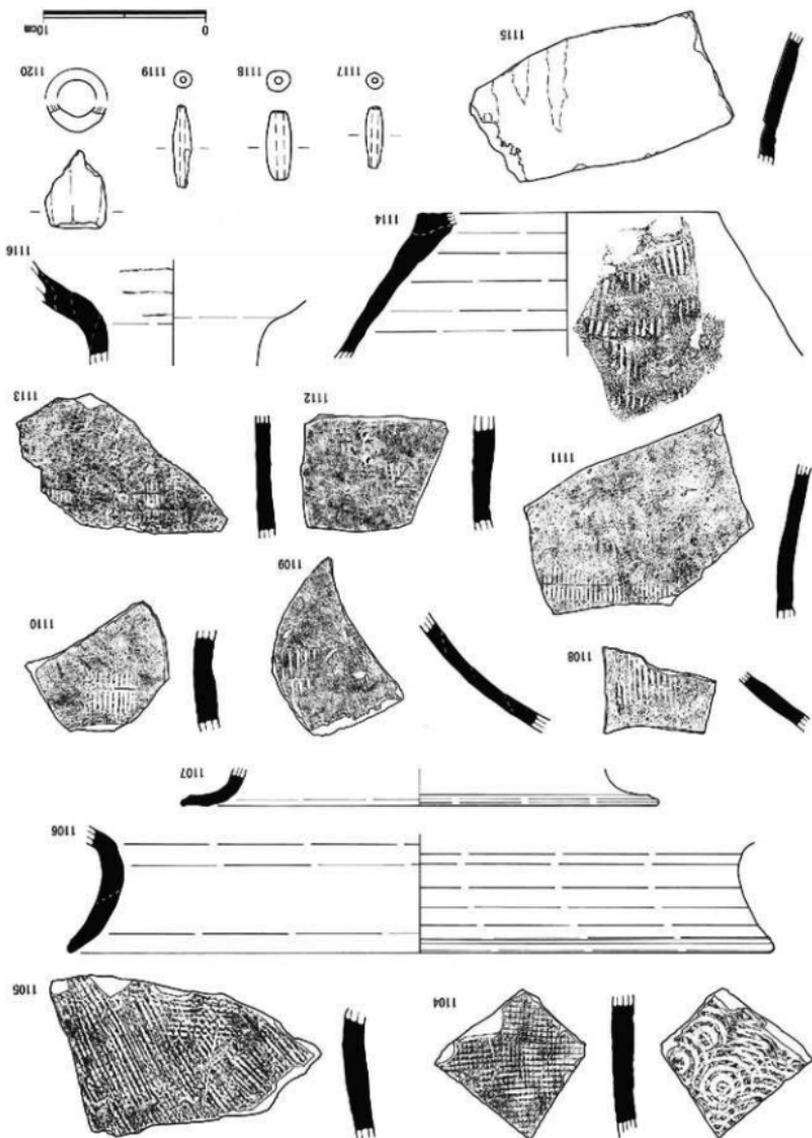


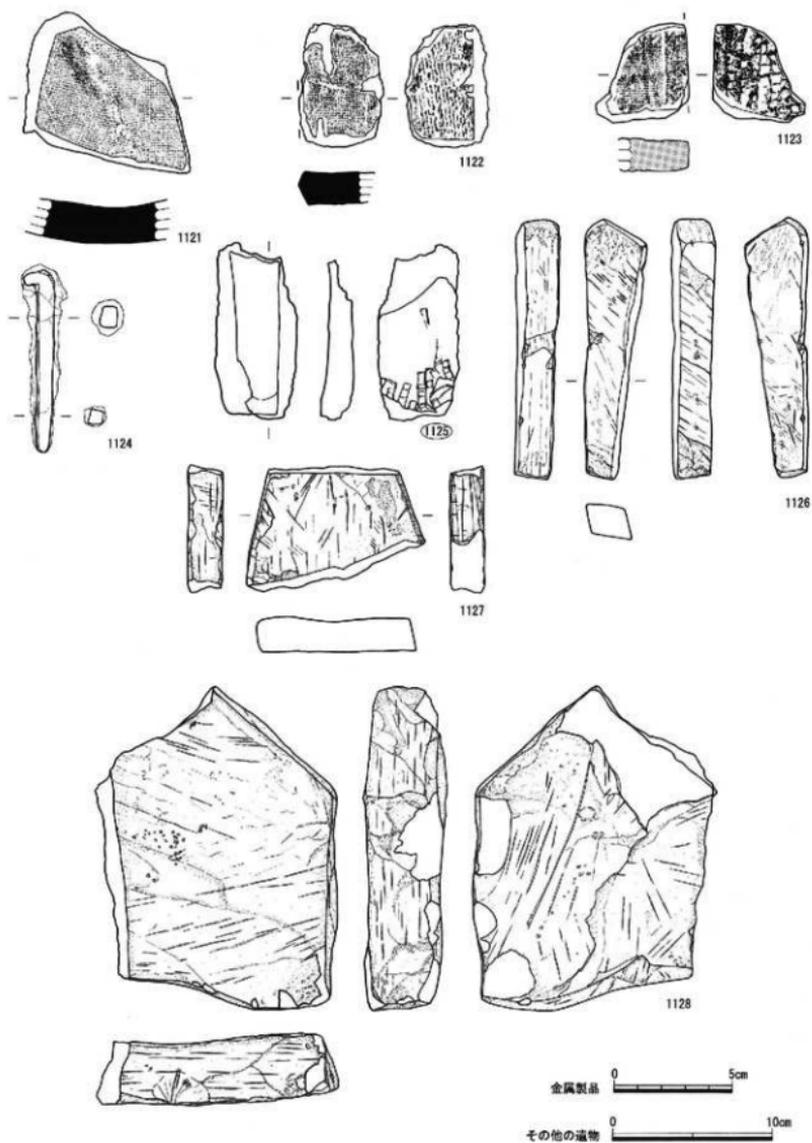
第356图 I地区 SD1056遗物实测图(3)



第357图 I地区 SD1056遗物实测图(4)

第358图 I地区 SD1056: 遗物素描图(5)





第359図 I地区 SD1056遺物実測図(6)

1117~1120は土師質管状土鉢。1120は径3.8cmの大型品である。1117・1118・1120は胎土にチャートを含む。1121・1122は須恵質の平瓦。1121は凹面に布目疋痕と模骨痕、凸面ナデ、1122は凹面に布目疋痕、凸面縄節文を残す。1123は瓦質平瓦。凹面に布目疋痕、凸面に格子タタキを残す。

1124は鉄釘。頂部を扁平に作り、折り曲げて頭部を作る。1125は粘板岩製の硯。海と陸の間に顕著な高低差はみられない。両縁部の欠損著しい。下面には連続した整痕が数条確認できる。二次加工の痕跡であるなら、未成で終わっていることから作業途中で廃棄されたと考えられる。1126~1128は砂岩製砥石。1126は柱状で4面を使用する。角の一部にわずかな敲打痕がみられる。1127・1128は板状で、前者は3面、後者は4面を使用する。

遺構の年代は、瓦器類などの出土遺物から13世紀前半が中心になると考えられる。

### 溝57号 (I地区 SD1057) (第360・361図)

I-9区西南隅、1~n3・4グリッドに位置する。検出長14.0m幅110cm深度42cmを測り、主軸はN4°Wを向く、直線的に延びる溝である。南北は調査区外に延びるが、北側の延長上にあるI-11区では検出されていない。断面は不整な逆台形状で、埋上は4層に分層できる。

遺物は土師質土器片・杯・皿(回転糸切り)・鍋・羽釜・土鉢、瓦器類、瓦質土器型鉢、須恵質土器貯蔵具、常滑陶器壺、備前陶器片、白磁碗、青磁碗、瓦片、鉄釘、鉄滓、砂岩製砥石、被熱砂岩標、焼土ブロック、炭化物片が出土。

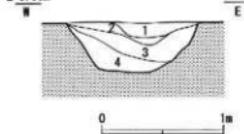
1129~1138は土師質土器皿。1138はやや深みがあり杯形を呈するが、小型のため皿として扱う。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。1129・1134~1136・1138は板目痕を伴う。1135は胎土にチャートを含む。1139~1149は土師質土器杯。回転台成形で、1140・1142~1148は底部外面に回転糸切り痕を残し、1143・1145~1147は板目痕を伴う。

1150~1153は瓦器類。1150は口径14.0cm器高4.8cmを測る完形品である。体部内面上位にヨコナデによる稜線がみられる。内面にランダムなヘラミガキを施すが、不明瞭である。炭素吸着はやや不良で、重焼痕を残す。標準的な和泉型ではないが、形状や調整から時期的には和泉型瓦器のⅢ-3期に併行すると考えられる。1151は口径12.8cm器高3.3cmを測る。底部外面に極めて低平な高台を、痕跡を含めて約2分の1のみ貼り付ける。残りの部分には炭素吸着がみられることから、当初から全周していなかったと考えられる。内面に螺旋状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好である。紀伊型瓦器類の可能性があり、和泉型瓦器Ⅳ-2期併行とみられ、13世紀後葉の年代が与えられる。1152は口径13.6cmを測り、体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器類Ⅲ-3~Ⅳ-1期に相当する。1153は底部外面に低平な断面三角形の高台を貼り付ける。炭素吸着はみられない。和泉型瓦器類Ⅲ-3~Ⅳ-2期とみられ、13世紀前葉~後葉の年代が与えられる。

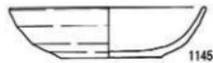
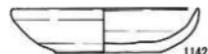
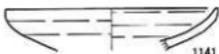
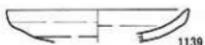
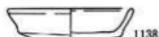
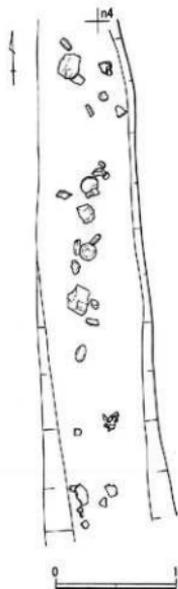
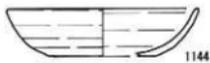
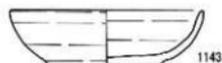
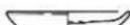
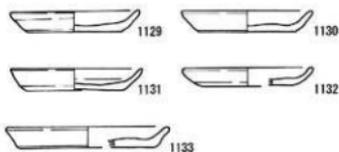
1154は白磁碗の底部。高台内側の削り出しは浅い。外面残存部は露胎である。胎土に微細な黒斑をわずかに含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ-1類に相当し、11世紀後半~12世紀前半の年代が与えられる。1155は青磁碗。体部外面にヘラ片影による籬蓋弁文を施文する。軸にごく粗い貫入を伴う。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類に相当し、13世紀初頭~前半の年代が与えられる。

1156は瓦質土器型鉢。口縁は内側に折り返して作り、端部をやや肥厚させる。炭素吸着は不良で、重焼により口縁外面にのみ黒色化する。胎土にチャートを含む。東播系須恵質土器型鉢に近似した形態を持つことから、その模倣品の可能性がある。1157は土師質土器鉢。小片のため、復元径は不正確である。

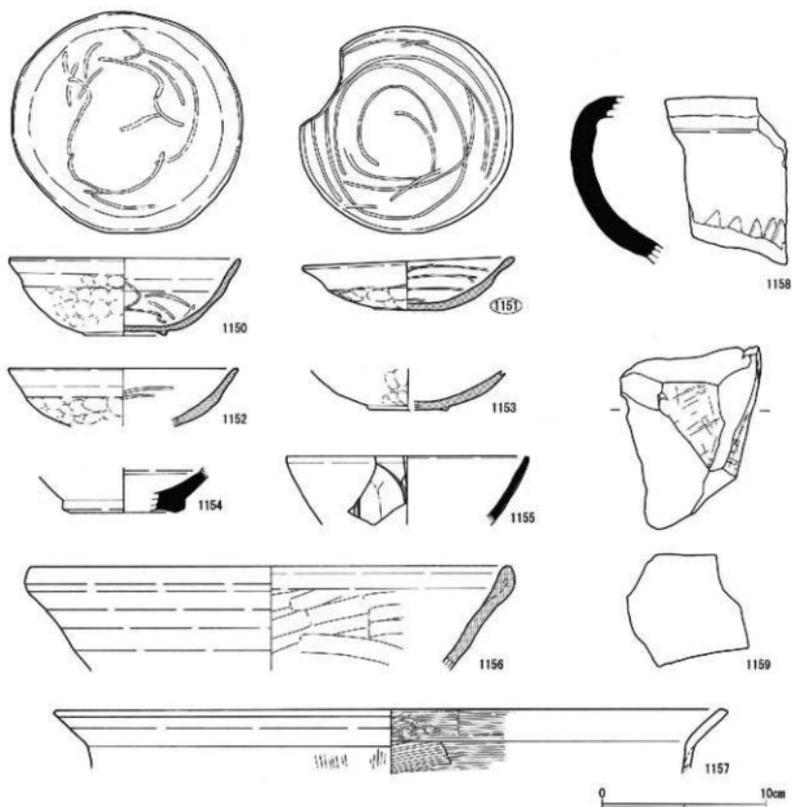
L=3.50m



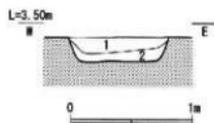
1. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)
2. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(しまり弱)
3. 暗褐色10YR3/2粘質土(しまり・粘性弱)
4. 黒褐色10YR3/2粘質土(しまり弱・粘性強)



第360図 I地区 SD1057遺構・遺物実測図(1)



第361図 I地区 SD1057遺物実測図(2)



1. 暗褐色10YR3/3粘質土(しまり・粘性強)
2. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり・粘性強)

第362図 I地区 SD1058遺構・遺物実測図

外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整し、ハケ目は細かい。胎土に角閃石を含む。吉備系の可能性が考えられる。1158は陶器甕。体部外面に縦位のケズリを施す。口縁内面と体部外面に自然軸が付着する。常滑焼の可能性が高い。1159は砂岩製砥石片。2面を使用する。

遺構の年代は、出土遺物から13世紀中葉～後半と考えられる。

#### 溝58号 (I地区 SD1058) (第362図)

I-9区西端南側, m・n 4グリッドに位置する, 全長4.6m幅104cm 深度20cmを測り, 主軸はN9°Wを向く。断面は逆台形状で, 埋土は2層に分層できる。遺物は土師質土器片・皿・鍋, 瓦器椀, 須恵質土器捏鉢・貯蔵具, 鉄釘, 鉄滓, サヌカイト製石器が出土。1160は土師質土器皿。回転台成形で, 磨耗により底部外面の切り離し痕は確認できない。遺構の年代は, 出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

#### 溝59号 (I地区 SD1059) (第363図)

I-9・10区西部, l~b 4グリッドに位置する, 検出長48.3m幅68cm 深度39cmを測り, 主軸はN3°Wを向く, 直線的に延びる溝である。南は調査区外に延び, 北はSD1056に切られて以北に延びない。断面はレンズ状または逆台形状・梯形状で, 埋土は5層に分層できる。底面は南に向けて下がる。SA1051~1053と近似した主軸方位をもつことから, 区画に関わる溝と考えられる。

遺物は土師質土器片・杯・皿(回転系切り)・鍋(鈎付ほか)・壺・土鍾, 瓦器椀, 須恵質土器捏鉢・貯蔵具, 白磁, 鉄釘, 鉄滓, 被熱凝灰岩礫, 壁土が出土。

1161~1163は土師質土器杯。回転台成形で, 底部外面に回転系切り痕を残し, 1162は板目痕を伴う。1164~1166は瓦器椀。口径13.6~14.4cmを測る。内面のヘラミガキは確認できない。内面の口縁体部境にヨコナデによる稜線がみられる。炭素吸着は1164がやや不良, 1165が不良, 1166が良好である。非和泉型の可能性があり, 形状や技法から和泉型瓦器IV-1期前後の併行と考えられる。

1167は東播系の須恵質土器捏鉢。酸化炎焼成気味で, 浅黄橙色を呈する。森田編年第二期第2段階に相当し, 12世紀末~13世紀初頭の年代が与えられる。1168は土師質土器鍋。口縁端部を内側に拡張し, 頸部外面は強いヨコナデを施す。現存部では鈎の存在を確認できないが, 形状や技法などから紀伊型の鈎付鍋であると考えられ, 口縁端部の形状から13世紀後葉~14世紀前葉の年代が与えられる。1169・1170は土師質管状土鍾。

遺構の年代は, 出土遺物から13世紀前半を中心にすると考えられる。

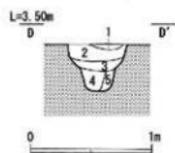
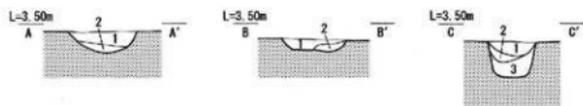
#### 溝60号 (I地区 SD1060) (第364図)

I-10区北東隅, d 8・9グリッドに位置する, 検出長7.4m幅178cm 深度18cmを測り, 主軸はN84°Eを向く, 直線的に延びる溝である。断面はレンズ状で, 埋土は2層に分層できる。西側は調査区外に, 東はI地区に向けて延び, I地区SD1001につながる。

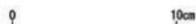
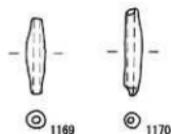
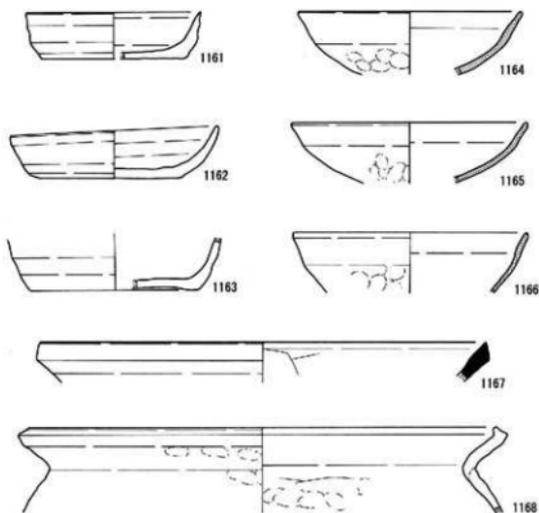
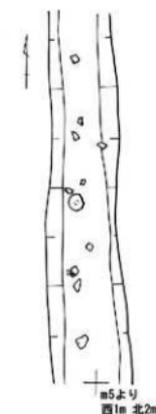
遺物は須恵器杯, 土師質土器片・鍋, 瓦器椀・皿, 須恵質土器貯蔵具, 白磁碗(玉縁), 近世陶磁(肥前系), 瓦製加工円盤が出土。1171は白磁碗。口縁端部を玉縁状に作る。大宰府分類の白磁碗IV類に相当し11世紀後半~12世紀前半の年代が与えられる。遺構の年代は, 出土遺物に時期幅があるものの近世遺物の出土が日立つことから, 概ね17世紀代と考えられる。

#### 不明遺構5号 (I地区 SX1005) (第365図)

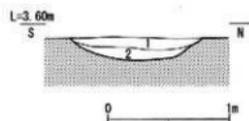
I-7区南東隅, k・l 2・3グリッドに位置する, 長軸382cm 残存幅134cm 深さ126cmを測る不整形の上坑状遺構で, 西側は調査区外に延びる。断面は不整な逆台形状で, 中途に幅約50cmの段を有する。



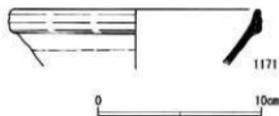
1. 褐色10YR4/4粘質土(しまり強)
2. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり強・粘性弱)
3. 暗褐色10YR3/3粘質土(しまり弱・粘性強)
4. 暗褐色10YR3/2粘質土(しまり・粘性強)
5. 灰黄褐色10YR4/2粘質土(しまり・粘性強)  
暗褐色粘質土ブロック含む



第363図 I地区 SD1059遺構・遺物実測図



1. 灰黄褐色10YR4/2粘質土(しまり・粘性強)
2. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり・粘性弱)



第364図 I地区 SD1060遺構・遺物実測図

埋上は10層に分層でき、7層下面で1回の掘り直しが確認できる。

遺物は土師器甕、土師質土器片・杯・皿（回転糸切り）・鍋、瓦器碗・皿、須恵質土器貯蔵具（平行タタキ）、青磁片、鉄滓が出土。1172は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀後半～13世紀代と考えられる。

#### 不明遺構 8号 (I地区 SX1008) (第366・367図)

I-8区西部北側、t18グリッドに位置する、長軸362cm 短軸178cm 深さ76cmを測る不整な楕円形土坑状遺構。断面は逆台形状で、埋上は5層に分層できる。遺物は各層で出土しており、東側にやや集中。

遺物は土師質土器片・杯・皿（回転糸切り）、瓦器碗、須恵質土器握鉢、陶器壺か甕、青磁碗、瓦質軒丸瓦、鉄釘、被熱砂岩礫、炭化物片が出土。

1173・1174は土師質土器皿、1175～1180は土師質土器杯。回転台成形で、1179を除き底部外面に回転糸切り痕を残す。1173・1175・1178は板目痕を伴う。1181・1182は瓦器碗で、口径12.6～12.7cm 器高2.2～2.4cmを測る。ともに体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。1181は底部内面に螺旋状とみられるヘラミガキ暗文を施し、炭素吸着やや不良で重焼痕を伴う。紀伊型瓦器碗の可能性があり、和泉型瓦器IV-2期に併行すると考えられる。1182は平行ヘラミガキ暗文を施し、炭素吸着は良好である。和泉型瓦器IV-2期に相当し、13世紀後半の年代が与えられる。

1183は陶器壺か甕の底部。断面観察によって底・体部の境に接合痕が確認できる。内面に自然釉が付着し、細かい貫入を伴う。産地時期ともに不明である。1184は瓦質軒丸瓦の瓦当部。周縁部を大きく欠くが、八葉複弁文であるとみられる。炭素吸着はみられないが、色調は淡黄色で還元炎焼成を日指したと考えられることから、瓦質と認定した。1185は鉄釘。断面は長方形で、頭部上面は平坦に作る。

遺構の年代は、出土遺物から13世紀中葉～後半と考えられる。

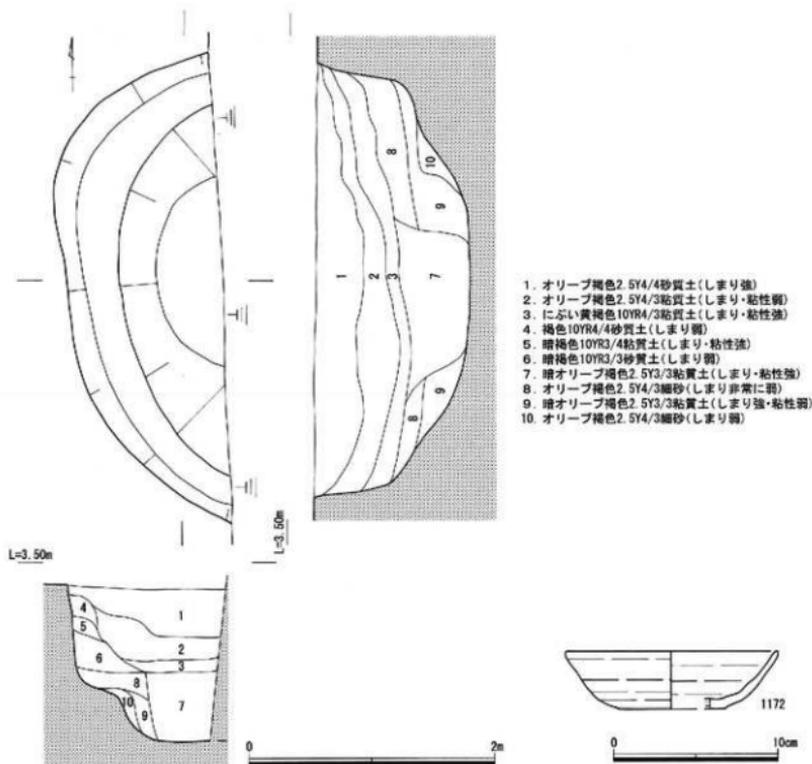
#### 不明遺構 9号 (I地区 SX1009) (第368図)

I-8区西部北側、t17・18グリッドに位置する、長軸164cm 短軸114cm 深さ40cmを測る不整な隅丸方形の土坑状遺構。断面は逆台形状であるが、床面は起伏をもつ。埋上は3層に分層できる。

遺物は土師質土器片・杯・皿、瓦器碗・皿、須恵質土器握鉢・甕・貯蔵具、常滑陶器甕、白磁片が出土。1186・1187は土師質土器皿、1188・1189は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。1188は胎上が粗く、チャートを含む。1190は瓦器碗。口径14.7cmを測り、体部内面に粗い横位のヘラミガキ、底部内面に螺旋状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好で、内外面に重焼痕を残す。紀伊型瓦器碗の可能性があり、和泉型瓦器III-3期併行とみられ、13世紀前半の年代が与えられる。1191は須恵質土器甕。胎土は粗く、焼成不良でわずかに炭素が付着する。東播系の可能性がある。1192・1193は常滑焼の陶器甕体部。外面に長格子押印文を施す。1192は外面に自然釉が付着する。遺構の年代は、出土遺物から13世紀前半と考えられる。

#### 不明遺構 11号 (I地区 SX1011) (第369図)

I-9区東端部中央、r・s10グリッドに位置する、長軸250cm 残存幅240cm 深さ78cmを測る不整方形の土坑状遺構で、東側は調査区外に延びる。断面は逆台形状で、底部はわずかに起伏を持ち、埋土は

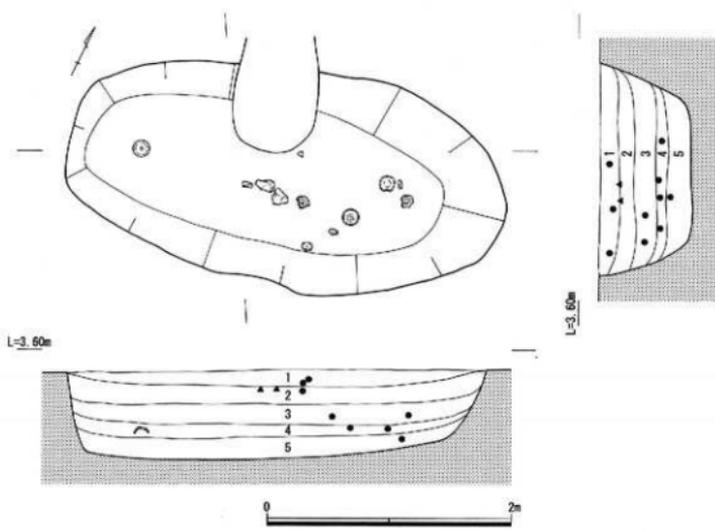


第365図 I地区 SX1005遺構・遺物実測図

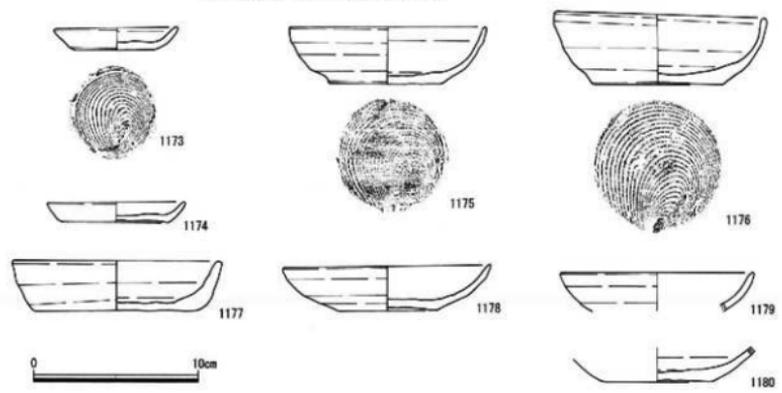
5層に分層できる。

遺物は土師質土器片・杯・皿(回転糸切り)・鍋・搦鉢か・土鍾, 瓦器椀, 瓦質土器片, 須恵質土器捏鉢・貯蔵具(平行タタキ), 白磁碗(玉縁), 青磁皿, 近世陶磁(瀬戸美濃系ほか), 鉄釘, 鉄滓が出土。

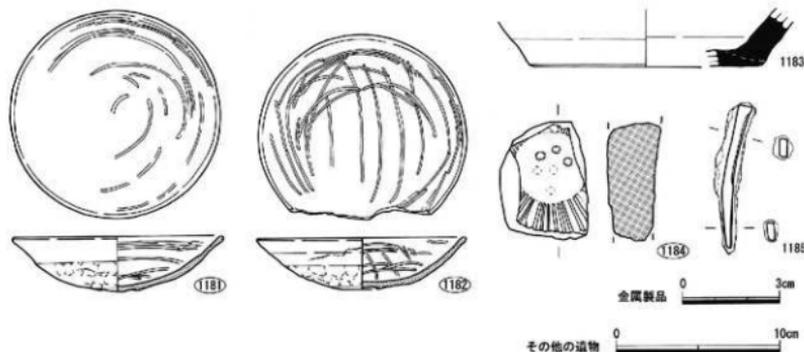
1194は土師質土器杯。回転台成形で, 底部外面は回転ヘラ切り痕を残す。1195・1196は瓦器椀。1195は口径14.2cmを測る。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ-2期に相当し, 12世紀末~13世紀初頭の年代が与えられる。1196は口径14.8cmを測る。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良で, 外面に重焼痕を残す。和泉型瓦器椀Ⅲ-3期に相当し, 13世紀前葉の年代が与えられる。1197は白磁碗。口径9.0cmの小型品で, 口縁は露胎(口禿)である。胎上に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅸ類に相当し, 13世紀中葉~14世紀初頭の年代が与えられる。



1. オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)
2. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(しまり強)
3. 暗褐色10YR3/4砂質土(しまり強)
4. 暗褐色10YR3/3粘質土(しまり・粘性強)
5. 暗褐色10YR3/3粘質土(しまり弱・粘性強)



第366図 I地区 SX1008遺構・遺物実測図(1)



第367図 I地区 SX1008遺物実測図(2)

1198・1199は東播系の須恵質土器器鉢。1198は口縁外面に重焼による炭素付着がみられる。森田編年第Ⅱ期第2段階に相当し、12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。1199は森田編年第Ⅲ期第1段階とみられ、13世紀前半～後半の年代が与えられる。

遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるものの概ね13世紀代と考えられる。

#### 小穴2号 (I地区 SP10002) (第370図)

I-1区西部南側、a4グリッドに位置する、径63cm 深度18cmを測る不整形の小穴。

遺物は土師質土器片・杯、瓦器碗、被熱結晶片岩礫が出土。1200は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。1201は瓦器碗。口径13.0cmを測る。体部外面に粘土接合痕が残る。体部内面は強いヨコナデの痕跡が残る。炭素吸着は良好である。腰が張り、体部が直線的に延びる形状や、口縁内面にヨコナデを施すことから非和泉型の可能性があるが、和泉型瓦器IV-1～2期併行期とみられ、13世紀中葉～後葉の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

#### 小穴55号 (I地区 SP10055) (第371図)

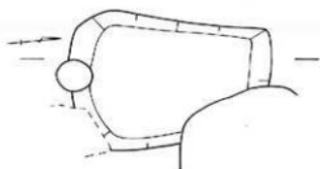
I-1区西部北側、e4グリッドに位置する、径31cm 深度28cmを測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・皿(回転糸切り)、須恵質土器甕が出土。1202は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕を残す。遺構の年代は、出土遺物から概ね12～13世紀代と考えられる。

#### 小穴117号 (I地区 SP10117) (第372図)

I-1区中央部、d5グリッドに位置する、径33cm 深度26cmを測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・皿(回転糸切り)が出土。1203は土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土にチャートとみられる粒子を含む。遺構の年代は、出土遺物から概ね12～13世紀代と考えられる。

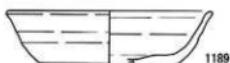
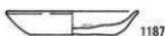
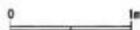
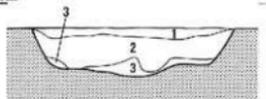
#### 小穴123号 (I地区 SP10123) (第373図)

I-1区中央部、d5グリッドに位置する、径50cm 深度26cmを測る不整形な隅丸方形の小穴。遺物は

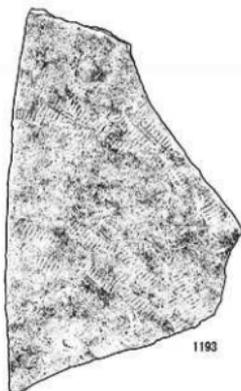


1. 褐色10YR4/4砂質土(しまり強)
2. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり強・粘性弱)
3. 暗褐色10YR3/3粘質土(しまり・粘性弱)

L=3.60m



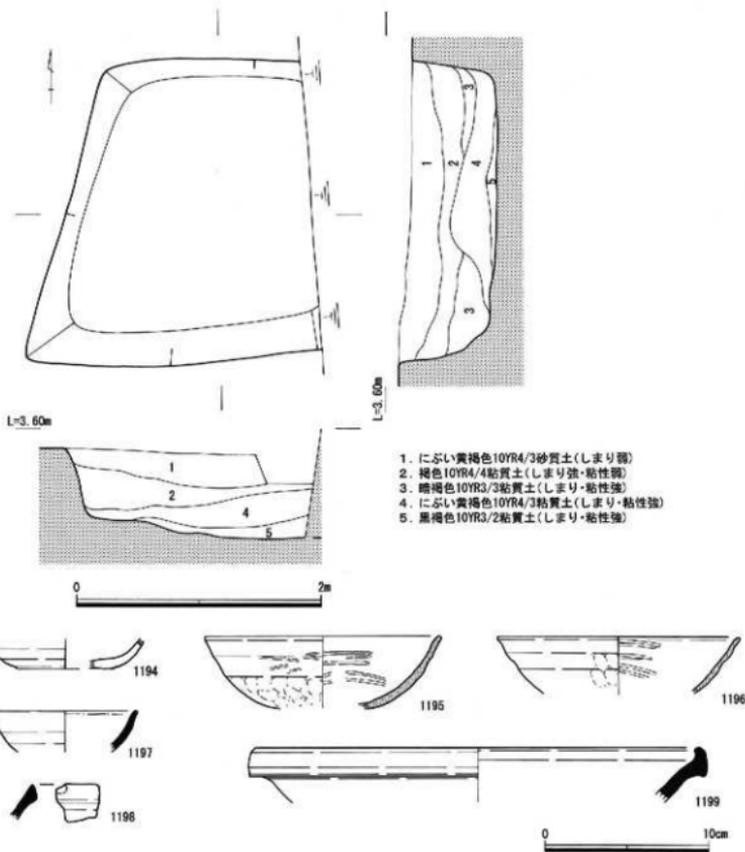
1192



1193



第368図 I地区 SX1009遺構・遺物実測図



第369図 I地区 SX1011遺構・遺物実測図

土師質土器片・杯・皿(回転糸切り)が出土。1204は土師質土器皿で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。遺構の年代は、出土遺物から概ね12～13世紀代と考えられる。

#### 小穴130号 (I地区 SP10130) (第374図)

I-1区中央部、d6グリッドに位置する。径49cm 深度35cmを測る不整な隅丸方形の小穴。遺物は土師質土器片・杯(回転糸切り)、青磁皿(同安窯系)が出土。1205は青磁皿。底部内面にへら片彫文・櫛描文を施す。外面の体部下端～底部は露胎である。大宰府分類の同安窯系青磁皿I-1b類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀後半～13世紀代と考えられる。

小穴132号 (I地区 SP10132) (第375図)

I-1区中央部、d5グリッドに位置する、径58cm 深度48cmを測る隅丸方形の小穴。遺物は土師質土器片・杯(回転系切り・円盤状高台ほか)・皿(回転系切り)・土鍾、瓦器輪、礎が出土。1206は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転系切り痕のち板日痕を残す。胎土に砂岩とみられる粒子を含む。遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

小穴139号 (I地区 SP10139) (第376図)

I-1区中央部北側、e5グリッドに位置する、径27cm 深度35cmを測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・皿(回転系切り)が出土。1207は土師質土器杯。回転台成形で底部外面に回転系切り痕のち板日痕を残す。遺構の年代は、出土遺物から概ね12～13世紀代と考えられる。

小穴166号 (I地区 SP10166) (第377図)

I-1区中央部南側、b6グリッドに位置する、径41cm 深度32cmを測る隅丸長方形の小穴。出土遺物は1点のみで、1208は土師質土器皿。回転台成形で底部外面に回転系切り痕を残す。胎土に在地花崗岩とみられる粒子を含む。遺構の年代は、出土遺物から概ね12～13世紀代と考えられる。

小穴167号 (I地区 SP1167) (第378図)

I-1区中央部南側、b6グリッドに位置する、径34cm 深度30cmを測る円形の小穴。遺物は土師質土器片、青磁碗が出土。1209は青磁碗。全体の50%が残存する。体部外面にヘラ片彫によって銘連弁文を施文する。高台外側まで施軸され、壘付と高台内側は露胎である。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗I-5b類に相当し、13世紀初頭～前半の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

小穴168号 (I地区 SP10168) (第379図)

I-1区中央部南側、b6グリッドに位置する、径53cm 深度25cmを測る楕円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯(回転系切り)、瓦器輪、鉄滓が出土。1210は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転系切り痕を残す。遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

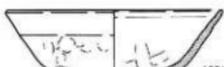
小穴339号 (I地区 SP10339) (第380図)

I-1区中央部南端、a6グリッドに位置する、長軸54cm 深度8cmを測る不整な隅丸方形の小穴。断面は浅い逆台形状で、埋土は1層である。

出土遺物は瓦器輪が3点のみで、埋土上位の検出面から出土。1211は口径16.2cmを測る。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器輪Ⅲ-1～2期に相当し、12世紀後葉～13世紀初頭の年代が与えられる。1212は口径14.8cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着はやや不良である。和泉型瓦器輪Ⅲ-3期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。1213は口径15.8cmを測るが、小片のため復元径は不正確である。体部内面に横位や斜位のランダムなヘラミガキを施す。炭素吸着は内面不良、外面やや不良である。和泉型瓦器輪Ⅲ-3期とみられ、13世紀前葉の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から12世紀後葉



1200



1201

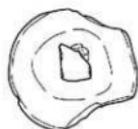
第370図 I地区 SP10002遺物実測図



1202

第371図 I地区  
SP10055遺物実測図

1203

第372図 I地区  
SP10117遺物実測図

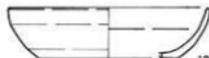
1204

第373図 I地区  
SP10123遺物実測図

1206

第374図 I地区  
SP10130遺物実測図

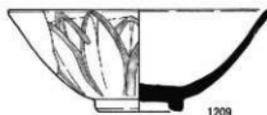
1205

第375図 I地区  
SP10132遺物実測図

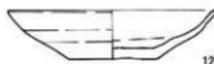
1207

第376図 I地区  
SP10139遺物実測図

1208

第377図 I地区  
SP10166遺物実測図

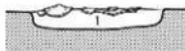
1209

第378図 I地区  
SP10167遺物実測図

1210

第379図 I地区  
SP10168遺物実測図

L=3.00m



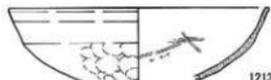
0 50cm

1. 暗灰黄色 2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)  
黒褐色粘質土ブロック含む

1211



1212



1213

0 10cm

第380図 I地区 SP10339遺構・遺物実測図

～13世紀前葉と考えられる。

#### 小穴385号（I地区 SP10385）（第381図）

I-2区西部、h2グリッドに位置する、径32cm 深度19cmを測る不整形の小穴。断面は逆台形状で、埋土は1層である。出土遺物は1点のみで、1214は土師質土器鉢。厚い器壁をもち、口縁端部を方形気味に仕上げ。体部外面下位はハケ、内面は板ナデによって調整する。胎土に金雲母を含む。瀬戸内沿岸～大阪湾岸からの搬入品と考えられる。12世紀代とみられるが、古代末に遡る可能性もある。遺構の年代は、出土遺物から12世紀前半の前後と考えられる。

#### 小穴392号（I地区 SP10392）（第382図）

I-2区西部北端、h2グリッドに位置する、径36cm 深度34cmを測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで、1215は土師質土器鍋。器壁は厚めで、胎土は粗く金雲母を含む。瀬戸内沿岸～大阪湾岸からの搬入品と考えられる。12世紀代とみられるが、古代末に遡る可能性もある。遺構の年代は、出土遺物から12世紀前半の前後と考えられる。

#### 小穴655号（I地区 SP10655）（第383図）

I-2区東部中央、i6グリッドに位置する、径34cm 深度34cmを測る隅丸方形の小穴。遺物は土師質土器片、瓦器碗、鉄製鋳が出土。1216は残存長11.2cmを測る棒状の鉄製品。断面は方形で、頭部は平坦に作る。鋳の可能性ある。遺構の年代は、出土遺物から12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

#### 小穴664号（I地区 SP10664）（第384図）

I-2区東部北側、j6グリッドに位置する、径32cm 深度21cmを測る楕円形の小穴。遺物は土師質土器杯（回転系切り）・皿（回転ヘラ切り）が出土。1217は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転ヘラ切り痕のち板目痕を残す。遺構の年代は、出土遺物から概ね12～13世紀代と考えられる。

#### 小穴734号（I地区 SP10734）（第385図）

I-2区東端部中央、i8グリッドに位置する、径24cm 深度20cmを測る不整形の小穴。出土遺物は1点のみで、1218は玉縁状口縁をもつ白磁碗。大宰府分類の白磁碗IV類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から12世紀前後と考えられる。

#### 小穴823号（I地区 SP10823）（第386図）

I-3区中央部、g・h13グリッドに位置する、径20cm 深度33cmを測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・碗が出土。1219は土師質土器碗。体部外面に指頭圧痕を残し、底部外面に断面三角形の高い高台を貼り付ける。胎土に花崗岩を含む。二次的な被熱によるものか部分的に炭素が付着する。吉備系土師質土器碗と考えられ、山本編年Ⅲ-1～2期に相当し、13世紀代の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

#### 小穴1088号 (I地区 SP11088) (第387図)

I-5区東部北側，○12グリッドに位置する，径31cm 深度20cmを測る不整円形の小穴。

遺物は須恵器供膳具，土師質土器片・羽釜，黒色土器碗（B類）が出土。1220は土師質土器羽釜。口縁は短く，端部は内側に拡張しない。鈿部は退化していない。奥井分類の河内Ⅱ型羽釜で，12世紀中葉頃とみられる。

#### 小穴1229号 (I地区 SP11229) (第388図)

I-7区西部北側，m18グリッドに位置する，径30cm 深度31cmを測る円形の小穴。遺物は土師質土器片，瓦器碗，青磁碗（同安窯系），白磁碗が出土。1221は白磁碗。軸は貫入を伴う。大宰府分類の白磁碗Ⅴ類またはⅦ類とみられ11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1222は青磁碗。体部外面に櫛描文を施す。軸は白濁気味である。大宰府分類の同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類に相当し，12世紀中葉～後半の年代が与えられる。遺構の年代は，出土遺物から概ね12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

#### 小穴1264号 (I地区 SP11264) (第389図)

I-7区中央部北側，n18・19グリッドに位置する，径43cm 深度24cmを測る円形の小穴。

遺物は土師質土器片・鍋・羽釜，瓦器碗が出土。1223は瓦器碗。口径13.8cmを測り，体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。和泉型瓦器碗Ⅳ-1期前後とみられ，13世紀中葉の年代が与えられる。1224は瓦器碗の底部。外面に断面三角形の低い高台を貼り付ける。内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期前後に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。1225は土師質土器鍋。厚い器壁と粗い胎土をもつ。12世紀代と考えられるが，古代末に遡る可能性もある。遺構の年代は，出土遺物から13世紀代と考えられる。

#### 小穴1280号 (I地区 SP11280) (第390図)

I-7区中央部北側，n19グリッドに位置する，径34cm 深度24cmを測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・皿が出土。1226は非回転台成形の土師質土器皿。京都系土師器皿Eタイプの模倣品と考えられる。遺構の年代は，出土遺物から概ね中世前半期と考えられる。

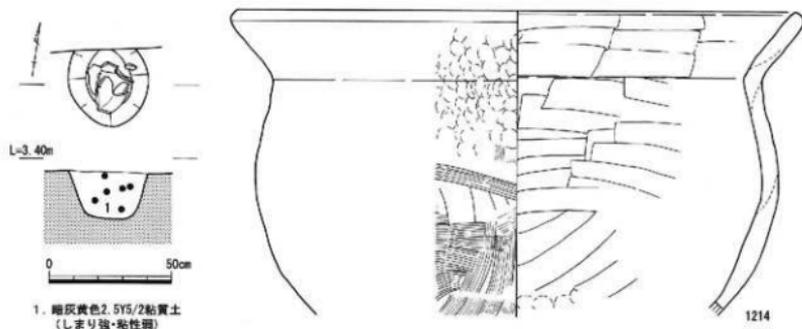
#### 小穴1294号 (I地区 SP11294) (第391図)

I-7区中央部北側，○20グリッドに位置する，径63cm 深度31cmを測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・皿（回転系切り），瓦器碗，鉄滓が出土。1227は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面に回転系切り痕を残す。1228は瓦器碗。口径14.1cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はみられない。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。遺構の年代は，出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

#### 小穴1314号 (I地区 SP11314) (第392図)

I-7区東部北側，○1グリッドに位置する，径25cm 深度31cmを測る円形の小穴。

遺物は弥生土器片，土師質土器片・杯，瓦器碗が出土。1229は土師質土器杯。回転台成形で，底部外面に回転系切り痕を残す。1230・1231は瓦器碗。1230は口径14.6cmを測る。体部外面に接合痕を残す。



1. 暗灰黄色2.5Y5/2粘質土  
(しまり強・粘性弱)

第381図 I地区 SP10385遺構・遺物実測図



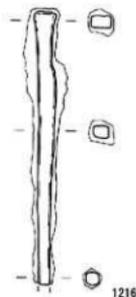
第382図 I地区  
SP10392遺物実測図



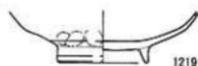
第384図 I地区  
SP10664遺物実測図



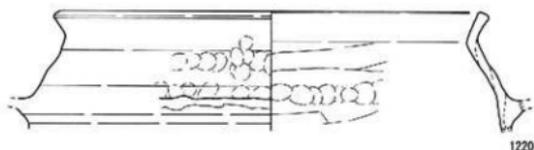
第385図 I地区  
SP10734遺物実測図



第383図 I地区  
SP10655遺物実測図



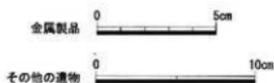
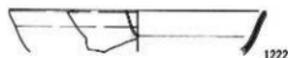
第386図 I地区  
SP10823遺物実測図



第387図 I地区  
SP11088遺物実測図



第388図 I地区  
SP11229遺物実測図



す。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、底部内面にジグザグ状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着はやや不良である。和泉型瓦器Ⅲ-3期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。1231は口径13.2cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器Ⅳ-1~2期に相当し、13世紀中葉~後葉の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

#### 小穴1331号 (I地区 SP11331) (第393図)

I-7区東部北端、o・p20グリッドに位置する、径38cm 深度16cmを測る円形の穴。

遺物は土師質土器片・皿・羽釜・上鉢、瓦器碗、須恵質土器捏鉢が出土。1232は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。1233は瓦器碗。口径13.8cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良で外面に重焼痕を残す。和泉型瓦器Ⅲ-3~IV-1期に相当し、13世紀前葉~中葉の年代が与えられる。1234は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁内外面に重焼による炭素付着がみられる。森田編年の第Ⅱ期第1~2段階に相当し、12世紀中葉~13世紀初頭の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から13世紀前葉~中葉と考えられる。

#### 小穴1355号 (I地区 SP11355) (第394図)

I-7区東部北端、p1グリッドに位置する、径25cm 深度21cmを測る不整形円形の穴。遺物は土師質土器杯・皿(回転糸切り)が出土。1235は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。遺構の年代は、出土遺物から概ね12~13世紀代と考えられる。

#### 小穴1430号 (I地区 SP11430) (第395図)

I-7区中央部北側、m19・20グリッドに位置する、径52cm 深度15cmを測る不整形円形の穴。遺構底部に根石を据える。

遺物は土師質土器片・杯、瓦器碗が出土。1236は土師質土器杯。非回転台成形である。胎土にチャートを含む。京都系土師器皿Dタイプの模倣品と考えられる。1237は瓦器碗。口径13.8cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器Ⅲ-3~IV-1期に相当し、13世紀前葉~中葉の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

#### 小穴1473号 (I地区 SP11473) (第396図)

I-7区西部北側、l18グリッドに位置する、径44cm 深度29cmを測る不整形円形の穴。遺物は土師質土器片・杯・皿、瓦器碗、鉄滓が出土。1238・1239は土師質土器皿。回転台成形で、1238は底部外面に回転糸切り痕を残す。遺構の年代は、出土遺物から12世紀後葉~13世紀前半と考えられる。

#### 小穴1480号 (I地区 SP11480) (第397図)

I-7区西部北側、l18グリッドに位置する、径49cm 深度26cmを測る円形の穴。遺物は土師質土器片・杯、瓦器碗、須恵質土器貯蔵具が出土。1240は土師質土器杯で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土に在地の花崗岩とみられる粒子を含む。1241は瓦器碗。口径13.4cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はみられない。和泉型瓦器Ⅳ-1~2期に相当し、13世紀中葉~後葉の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から13世紀後半と考えられる。

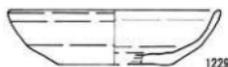


第389図 I地区 SP11264遺物実測図

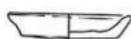
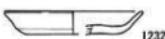


第390図 I地区  
SP11280遺物実測図

第391図 I地区 SP11294遺物実測図

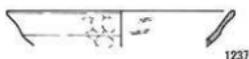


第392図 I地区 SP11314遺物実測図



第393図 I地区 SP11331遺物実測図

第394図 I地区  
SP11355遺物実測図



第395図 I地区 SP11430遺物実測図



第396図 I地区  
SP11473遺物実測図

第397図 I地区 SP11480遺物実測図



小穴1502号 (I地区 SP11502) (第398図)

I-7区中央部、118グリッドに位置する、径37cm 深度33cmを測る不整形円形の小穴。

遺物は土師質土器片・杯(回転糸切り)・土鉢、瓦器椀・加工円盤、青磁碗(蓮弁文)、備前陶器片、鉄釘、壁土が出土。1242は土師質土器皿。底部外面に指頭圧痕を残す。胎土にチャートを含む。京都系土師器皿Eタイプの模倣品と考えられ、13世紀代の年代が与えられる。1243は瓦器椀。口径14.8cmを

測る。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器Ⅲ-3期とみられ、13世紀前葉の年代が与えられる。1244は青磁碗。体部外面にヘラ片影による縞連弁文を施す。釉はわずかに白濁しており透明度が低いため文様は不鮮明である。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5a類に相当し、13世紀初頭～前半の年代が与えられる。1245は瓦器椀体部片を転用した加工円盤。側面を研削整形し、径約2cmの凹盤状に仕上げる。炭素吸着はみられず、本来の内面にヘラミガキ、外面に指頭圧痕を残す。基石としての用途も考えられる。遺構の年代は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

#### 小穴1523号（I地区 SP11523）（第399図）

I-7区中央部、119グリッドに位置する、径74cm 深度46cmを測る不整な隅丸方形の小穴。遺物は土師質土器片・杯（回転系切り）・鍋、瓦器椀、須恵質土器控鉢・貯蔵具、鉄釘が出土。1246は東播系の須恵質土器控鉢。焼成不良で内外面に炭素付着がみられる。森田編年の第Ⅱ期第1段階に相当し、12世紀中葉～後半の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から12世紀後半～13世紀前葉と考えられる。

#### 小穴1559号（I地区 SP11559）（第400図）

I-7区中央部、m20グリッドに位置する、径57cm 深度37cmを測る円形の小穴。遺構底部に根石を据える。遺物は土師質土器片・杯・皿（回転系切り）、瓦器椀、常滑陶器甕が、が出土。1247は陶器甕の体部片。外面に不鮮明なタテハケまたは板ナデによって調整したのち、押印文を施す。常滑焼の可能性が高い。遺構の年代は、出土遺物から概ね12世紀後半～13世紀代と考えられる。

#### 小穴1590号（I地区 SP11590）（第401図）

I-7区東部南側、m1・2グリッドに位置する、径56cm 深度34cmを測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・皿（回転系切り）・十鉢、瓦器椀・皿、須恵質土器貯蔵具（平行タタキ）が出土。1248は瓦器皿。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器のⅢ-3～Ⅳ期に併行する時期とみられる。遺構の年代は、出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

#### 小穴1635号（I地区 SP11635）（第402図）

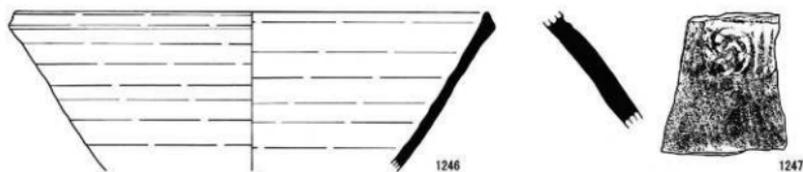
I-7区東部南側、12グリッドに位置する、径43cm 深度22cmを測る不整円形の小穴。断面は椀形で、埋土は2層に分層できる。遺物は1点のみで、1249は土師器甕。遺構中央部、1層の下面に集中して出土した。長胴形の甕で体部外面はタテハケ、内面は板ナデによって調整される。胎土は粗く、結晶片岩を含む。遺構の年代は、出土遺物から7世紀代と考えられる。

#### 小穴1643号（I地区 SP11643）（第403図）

I-7区東部南側、12グリッドに位置する、径54cm 深度44cmを測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・杯（回転ヘラ切り・回転系切り）・甕（平行タタキ、須恵質か）、瓦器椀が出土。1250は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面に回転系切り痕を残す。胎土にチャートを含む。1251は瓦器椀。口径14.0cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器Ⅲ-3期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

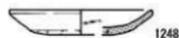


第398図 I地区 SP11502遺物実測図

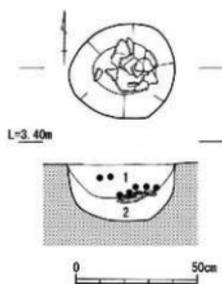


第399図 I地区 SP11523遺物実測図

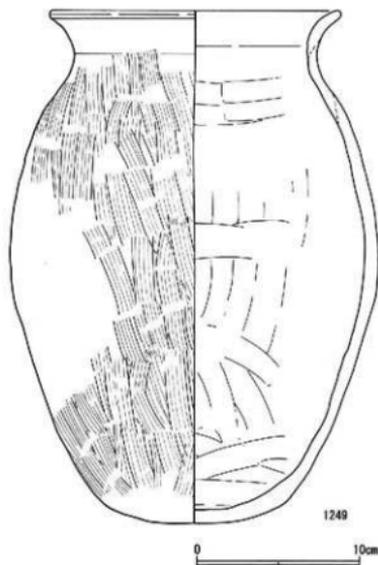
第400図 I地区 SP11559遺物実測図



第401図 I地区 SP11590遺物実測図



1. 反黄褐色10YR4/2砂質土(しまり強)
2. 暗褐色10YR3/3砂質土(しまり弱)



第402図 I地区 SP11635遺構・遺物実測図

小穴1668号 (I地区 SP11668) (第404図)

I-7区中央部南側、11グリッドに位置する、径45cm 深度26cmを測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・杯(回転糸切り)、瓦器碗、青磁合子蓋、鉄滓が出土。1252は青磁合子蓋。外面に花文を陰刻し、のち外面のみ施釉する。釉は貫入を伴い、一部が白濁する。遺構の年代は、出土遺物から12世

紀後葉～13世紀代と考えられる。

#### 小穴1705号 (I地区 SP11705) (第405図)

I-7区中央部, i 20グリッドに位置する, 径36cm 深度41cm を測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・皿, 不明鉄製品が出土。1253は人針状の鉄製品。残存長5.0cm を測る。遺構の年代は不明である。

#### 小穴1743号 (I地区 SP11743) (第406図)

I-7区西部中央, j 17グリッドに位置する, 径42cm 深度34cm を測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片, 瓦器碗が出土。1254は瓦器碗。口径15.6cm を測る。体部内面に横位のヘラムガキを施す。炭素吸着は内面不良, 外面やや不良である。体部外面に斜位の線刻1条, 内面に縦位・斜位の線刻を多数, 焼成後に施す。和泉型瓦器碗IV-1期に相当し, 13世紀中葉の年代が与えられる。遺構の年代は, 出土遺物からと考えられる。13世紀中葉～後半とみられる。

#### 小穴1755号 (I地区 SP11755) (第407図)

I-7区中央部南側, k 19グリッドに位置する, 径47cm 深度23cm を測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・碗・皿・銅, 瓦器碗, 鉄釘, 桃種子が出土。1255は非回転台成形の土師質土器皿。底部外面に指頭圧痕を残す。胎土に黒色粒を含み, 金雲母を含有しない。京都系土師器皿Dタイプの模倣品と考えられ, 13世紀代の年代が与えられる。1256は回転台成形の土師質土器皿。底部外面の切り離し技法は回転ヘラ切りとみられる。遺構の年代は, 出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

#### 小穴1771号 (I地区 SP11771) (第408図)

I-7区東部南側, k 1グリッドに位置する, 径29cm 深度25cm を測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・土鍾, 瓦器碗, 白磁碗が出土。1257は白磁碗。玉縁状口縁をもつ。軸は緑色がかかり, 胎土は灰味が強く微細な黒色粒を含む。大宰府分類の白磁碗IV類に相当し, 11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。遺構の年代は, 出土遺物から概ね12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

#### 小穴1838号 (I地区 SP11838) (第409図)

I-7区中央部南側, j 19グリッドに位置する, 径39cm 深度21cm を測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・皿, 瓦器碗, 鉄釘, 焼土ブロックが出土。1258は回転台成形の土師質土器皿。底部外面に回転糸切り痕のち板日痕を残す。1259は非回転台成形の土師質土器皿。底部外面に指頭圧痕を残す。京都系土師器皿Dタイプの模倣品と考えられ, 13世紀代の年代が与えられる。遺構の年代は, 出土遺物から13世紀代と考えられる。

#### 小穴1870号 (I地区 SP11870) (第410図)

I-7区中央部南側, i 18グリッドに位置する, 径27cm 深度23cm を測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・皿, 瓦器碗が出土。1260は土師質土器皿, 1261・1262は土師質土器杯。回転台成形で, 底部外面に回転糸切り痕のち板日痕を残す。1262は胎土にチャートと在地の花崗岩を含む。遺構の

年代は、出土遺物から概ね12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

#### 小穴1908号（I地区 SP11908）（第411図）

I-7区西部南側、118グリッドに位置する、径41cm 深度20cmを測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・皿が出土。1263は土師質土器皿。回転台成形で、底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土に絹雲母を含む。1264・1265は土師質土器杯。非回転台成形で、底部外面に指頭圧痕を残す。1264は京都系土師器皿Dタイプ、1965はEタイプの模倣品とみられ、13世紀代の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から13世紀代と考えられる。

#### 小穴1998号（I地区 SP11998）（第412図）

I-8区西端部中央、16グリッドに位置する、径47cm 深度42cmを測る不整形円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・鍋、鉄滓が出土。1266は土師質土器杯。回転台成形で、底部外面は回転ヘラ切り痕をナデ消す。遺構の年代は不明である。

#### 小穴2110号（I地区 SP12110）（第413図）

I-8区西端部中央、17グリッドに位置する、径30cm 深度48cmを測る不整形円形の小穴。遺物は土師質土器片、瓦器椀、白磁皿が出土。1267は白磁皿。体部外面下位は回転ヘラケズリ調整される。内面～体部外面上位に施軸され、以下總胎である。軸は黄味を帯び、細かい貫入を伴う。森田分類の白磁皿D群に相当し、15世紀前半の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物に時期幅があるものの、白磁皿から15世紀代と考えられる。

#### 小穴2359号（I地区 SP12359）（第414図）

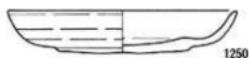
I-8区中央部、19グリッドに位置する、径32cm 深度31cmを測る不整形円形の小穴。断面はU字状で、埋土は3層に分層できる。出土遺物は1点のみで、1268は須恵質土器甕。埋土1層の最上位から出土している。外面の頸部～体部に細かい平行タキを施し、体部内面に無紋の当具痕を残す。讃岐の十瓶山系とみられるが、同地産とは断定できない。佐藤編年IV-2期とみられ、12世紀初頭の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から12世紀代と考えられる。

#### 小穴2553号（I地区 SP12553）（第415図）

I-9区南東隅、10グリッドに位置する、径44cm 深度35cmを測る不整形円形の小穴。遺物は土師質土器片・鍋、瓦器椀が出土。1269は瓦器椀で、口径14.4cm。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好で、外面に熏焼痕を残す。和泉型瓦器椀Ⅲ-1～2期、12世紀後葉～13世紀初頭の年代が与えられる。1270は土師質土器鍋。厚い器壁をもち、口縁端部を方形に作る。胎土は粗く、金雲母を含む。12世紀代と考えられ、古代末に遡る可能性あり。

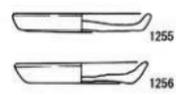
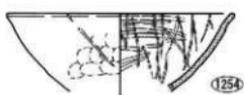
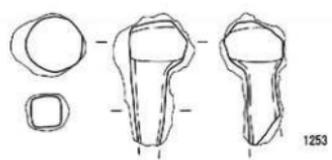
#### 小穴2554号（I地区 SP12554）（第416図）

I-9区南東隅、10グリッドに位置する、径30cm 深度32cmを測る不整形円形の小穴。遺物は土師質土器片、青磁碗が出土。1271は青磁碗。体部内面にヘラ片彫による陰刻花文を施す。軸に粗い貫入を伴う。



第403図 I地区 SP11643遺物実測図

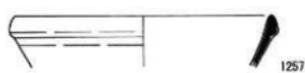
第404図 I地区 SP11668遺物実測図



第405図 I地区 SP11705遺物実測図

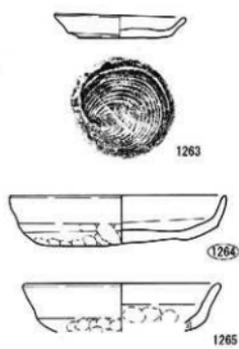
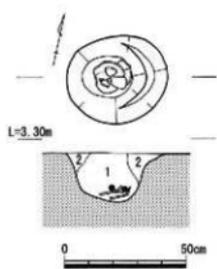
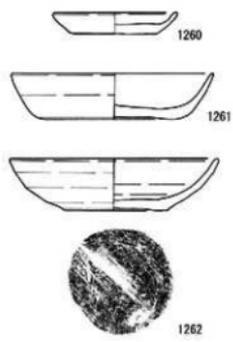
第406図 I地区 SP11743遺物実測図

第407図 I地区 SP11755遺物実測図



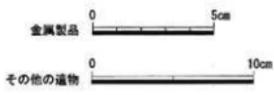
第408図 I地区 SP11771遺物実測図

第409図 I地区 SP11838遺物実測図



第410図 I地区 SP11870遺物実測図

第411図 I地区 SP11908遺構・遺物実測図



第412図 I地区 SP11998遺物実測図

第413図 I地区 SP12110遺物実測図

大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から12世紀後半と考えられる。

#### 小穴2589号 (I地区 SP12589) (第417図)

I-9区南東隅、q10グリッドに位置する、径49cm 深度43cmを測る楕円形の小穴。遺物は土師質土器片、瓦器碗、白磁碗が出土。1272は白磁碗の底部。軸は黄味がかかる。外面の体部下位～底部は露胎である。胎土は灰味が強い。大宰府分類の白磁碗Ⅲ類に相当し12世紀中葉～後半の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から12世紀後半～13世紀代と考えられる。

#### 小穴2614号 (I地区 SP12614) (第418図)

I-9区東部中央、r9グリッドに位置する、径28cm 深度17cmを測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片、瓦器碗が出土。1273は完形の瓦器碗。口径13.4cmを測る。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器碗Ⅳ-1～2期に相当し、13世紀中葉～後葉の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から13世紀後半と考えられる。

#### 小穴2638号 (I地区 SP12638) (第419図)

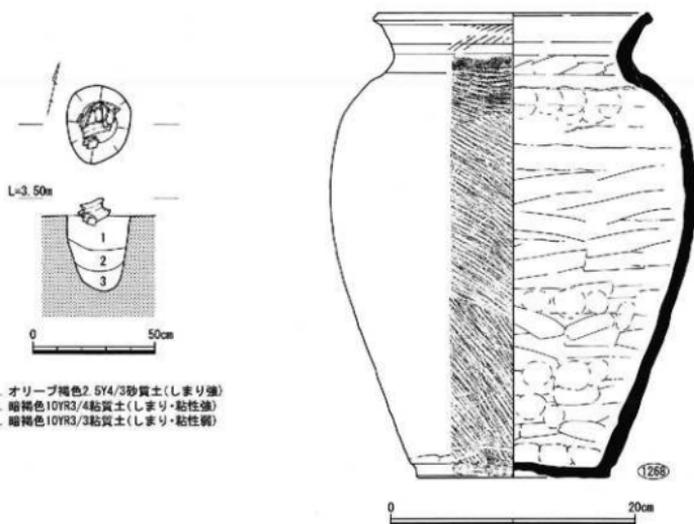
I-9区東端部中央、r10グリッドに位置する、径43cm 深度27cmを測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・皿・鍋、瓦器碗、青磁碗が出土。1274は青磁碗。体部内面にヘラ片形による区画文と飛雲文を施す。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4a類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。遺構の年代は、出土遺物から12世紀後葉～13世紀前半と考えられる。

#### 小穴2670号 (I地区 SP12670) (第420図)

I-9区東端部中央、s10グリッドに位置する、径32cm 深度29cmを測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・甕・土鍾、瓦器碗、須恵質土器捏鉢が出土。1275は土師質土器鍋の口縁。頸部外面にタテハケ、口縁内面にヨコハケを施す。外面および破面の一部に煤が付着する。遺構の年代は、出土遺物から12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

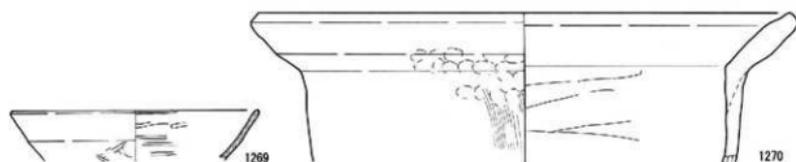
#### 小穴2671号 (I地区 SP12671) (第421図)

I-9区東端部中央、s9・10グリッドに位置する、径61cm 深度28cmを測る不整形な隅丸方形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・鍋、瓦器碗・皿が出土。1276は瓦器皿。体部内面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器のⅢ-3期に併行する時期と考えられる。1277・1278は瓦器碗。1277は口径15.0cmを測り、体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好で、内面に重焼痕を残す。和泉型瓦器碗Ⅲ-1～2期に相当し、12世紀後葉～13世紀初頭の年代が与えられる。1278は体部内面に密な横位のヘラミガキ、底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期とみられるが、やや古相を呈する。遺構の年代は、出土遺物から12世紀後葉～13世紀前半と考えられる。



1. オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
2. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり・粘性強)
3. 暗褐色10YR3/3粘質土(しまり・粘性弱)

第414図 I地区 SP12359遺構・遺物実測図



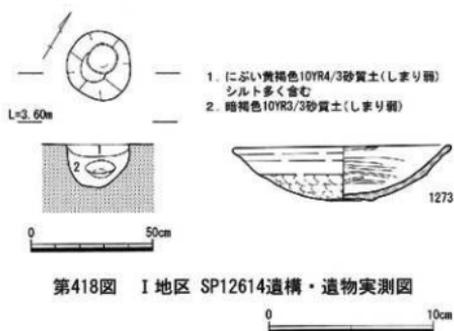
第415図 I地区 SP12553遺物実測図



第416図 I地区  
SP12554遺物実測図



第417図 I地区  
SP12589遺物実測図



1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(しまり弱)  
シルト多く含む
2. 暗褐色10YR3/3砂質土(しまり弱)

第418図 I地区 SP12614遺構・遺物実測図

#### 小穴2673号 (I地区 SP12673) (第422図)

I-9区東端部中央, s10グリッドに位置する, 径37cm 深度28cm を測る円形の小穴。

遺物は土師質土器片, 瓦器碗, 須恵質土器型鉢が出土。1279は瓦器碗。体部外面に粘土接合痕を残す。体部内面に横位のヘラミガキ, 底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着はやや不良で, 内面にハゼによる剥離がみられる。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期に相当し, 13世紀前葉の年代が与えられる。1280は東播系の須恵質土器型鉢。口縁端部を内側に拡張する。重焼により口縁内外面に炭素付着がみられる。森田編年第二期第1段階に相当し, 12世紀中葉～後半の年代が与えられる。遺構の年代は, 出土遺物から13世紀前半と考えられる。

#### 小穴2678号 (I地区 SP12678) (第423図)

I-9区東端部中央, s9・10グリッドに位置する, 径29cm 深度23cm を測る円形の小穴。断面は方形で, 埋土は3層に分層できる。遺物は土師質土器片, 瓦器碗, 焼土ブロックが出土。1281は瓦器碗。埋土の1・2層間から出土しており, 柱抜き取り後に埋納したものと考えられる。口径14.1cm を測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキ, 底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着不良で, 酸化炭焼成気味。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期に相当し, 13世紀前葉の年代が与えられる。

#### 小穴2685号 (I地区 SP12685) (第424図)

I-9区東部中央, s9グリッドに位置する, 径43cm 深度22cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・羽釜, 瓦器碗・皿が出土。1282は瓦器皿。ヘラミガキは確認できないが法量が大きく, 和泉型瓦器Ⅲ-3期に併行期と考えられる。1283は瓦器碗。口径14.9cm を測る。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器碗Ⅲ-3期に相当し, 13世紀前葉の年代が与えられる。

#### 小穴2816号 (I地区 SP12816) (第425図)

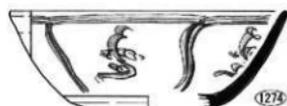
I-9区中央部北側, s6グリッドに位置する, 径55cm 深度20cm を測る不整な隅丸方形の小穴。遺物は土師質土器片, 瓦器碗, 青磁碗が出土。1284は青磁碗。体部外面に蓮弁文を施文し, 底部内面に印花文を施す。壘付より内側は露胎である。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗I-5c類に相当し, 13世紀中頃～14世紀初頭の年代が与えられる。

#### 小穴3152号 (I地区 SP13152) (第426図)

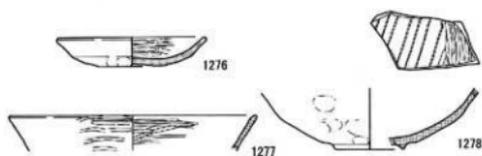
I-11区東部, g・h8グリッドに位置する, 径27cm 深度15cm を測る不整円形の小穴。断面は逆台形状で, 埋土は1層である。出土遺物は1点のみで, 1285は土師質土器皿。埋土の最上位から出土している。回転台成形で, 底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。遺構の年代は不明である。

#### 〈I地区 第1包含層出土遺物〉(第427～429図)

1286は須恵器杯蓋。1287は土師質土器碗。底部外面に断面が鋭い三角形の高台を貼り付ける。形状は吉備系土師質土器碗に近似するが, 胎土が比較的精良でチャートを含むため, 在地での模倣品の可能性がある。1288～1290は土師質土器皿。回転台成形で, 1288・1289は底部外面に回転系切り痕のち板目痕を残し, 1290は回転ヘラ切り痕をナデ消す。1290は胎土に砂岩とみられる粒子を含む。1291



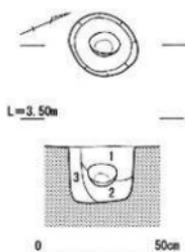
第419図 I地区  
SP12638遺物実測図



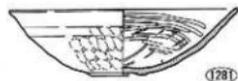
第421図 I地区 SP12671遺物実測図



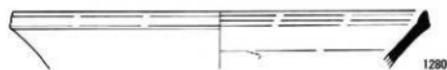
第420図 I地区  
SP12670遺物実測図



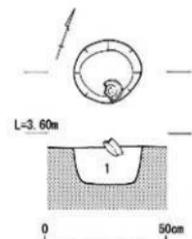
1. にぶい黄褐色10YR4/3砂質土(しまり強)
2. 暗褐色10YR3/3粘質土(しまり・粘性強)
3. 灰黄褐色10YR4/2粘質土(しまり・粘性強)



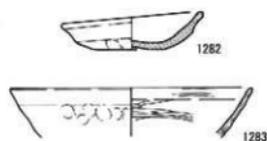
第423図 I地区 SP12678遺構・遺物実測図



第422図 I地区 SP12673遺物実測図



1. 暗褐色10YR3/4粘質土(しまり・粘性強)



第424図 I地区  
SP12685遺物実測図



第425図 I地区  
SP12816遺物実測図



第426図 I地区  
SP13152遺構・遺物実測図



～1293は土師質土器杯。回転成形で底部外面に回転系切り痕を残し、1291・1293は板目痕を伴う。胎土は、1291に在地花崗岩とみられる粒子、1292にチャート・砂岩を含む。

1294は瓦器皿。器壁は薄く、ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器のⅣ期に併行すると考えられる。

1295～1302は瓦器碗。1295は口径14.8cmを測り、体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器碗Ⅲ-2期に相当し、12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。1296～1298は口径14.4～15.8cmを測り、体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し、1297は底部内面に平行ヘラミガキ暗文、1298は斜格子状とみられるヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は、1296が不良、1297が良好、1298はやや不良である。ともに和泉型瓦器碗Ⅲ-3期に相当し、13世紀前葉の年代が与えられる。1299・1300は口径13.0～14.0cmを測り、体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は不良で、1299は酸化炎焼成気味である。ともに和泉型瓦器碗で、Ⅲ-3～Ⅳ-1期に相当すると考えられる。

1301は体部内面に細かいヨコハケによって丁寧に調整したのち連結輪状とみられるヘラミガキ暗文を施す。体部外面には粘土接合痕を残す。紀伊型瓦器碗の可能性があり、和泉型瓦器Ⅲ-3期併行期と考えられる。

1302は口径13.8cm 器高3.1cmを測り、きわめて低平である。体部は腰の部分で屈曲し、結果的に水平な広い底部を作る。体部内面に粗い横位のヘラミガキ、底部内面に螺旋状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面良好、外面やや不良である。紀伊型瓦器碗の可能性があり、和泉型瓦器Ⅳ-1期に相当し、13世紀中葉の年代が与えられる。

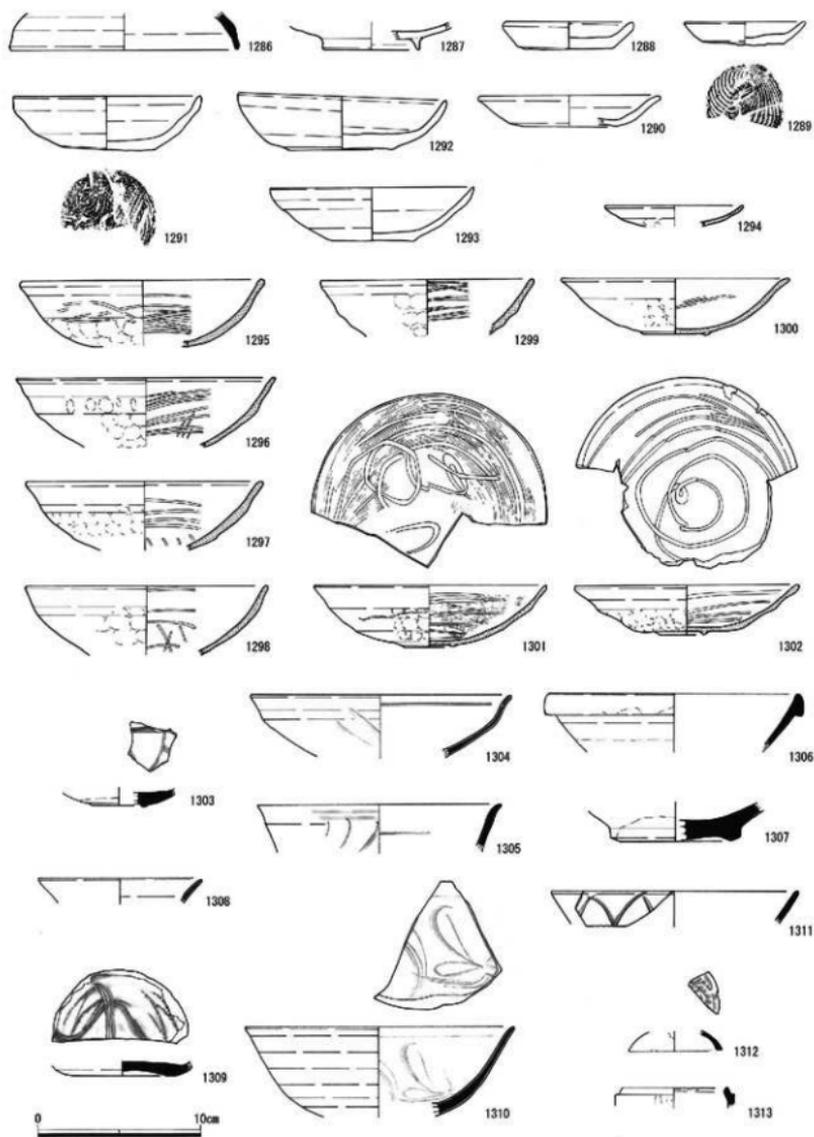
1303は白磁皿の底部。内面にヘラ描き花文を施す。釉に細かい貫入を伴い、胎土に微細な黑色粒を含む。外面の体部下端～底部は露胎である。大宰府分類の白磁皿Ⅶ-1 b類かⅦ-2類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。

1304～1307は白磁碗。1304・1305は体部外面に斜位のヘラ片影文を施し、体部内面上位に1条の沈線を引き、1304の釉は緑色味を帯び、全体的に薄くかける。釉とびがみられる。ともに大宰府分類Ⅴ-2 b類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1306は玉縁状の口縁をもつ。釉に粗い貫入を伴う。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し、11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1307は底部で、高台内側の削り出しは浅い。釉は緑色がかかり、全体的に薄く施釉する。体部外面下端～高台外側まで施釉され、底部外面は露胎である。大宰府分類白磁碗Ⅳ類と考えられる。

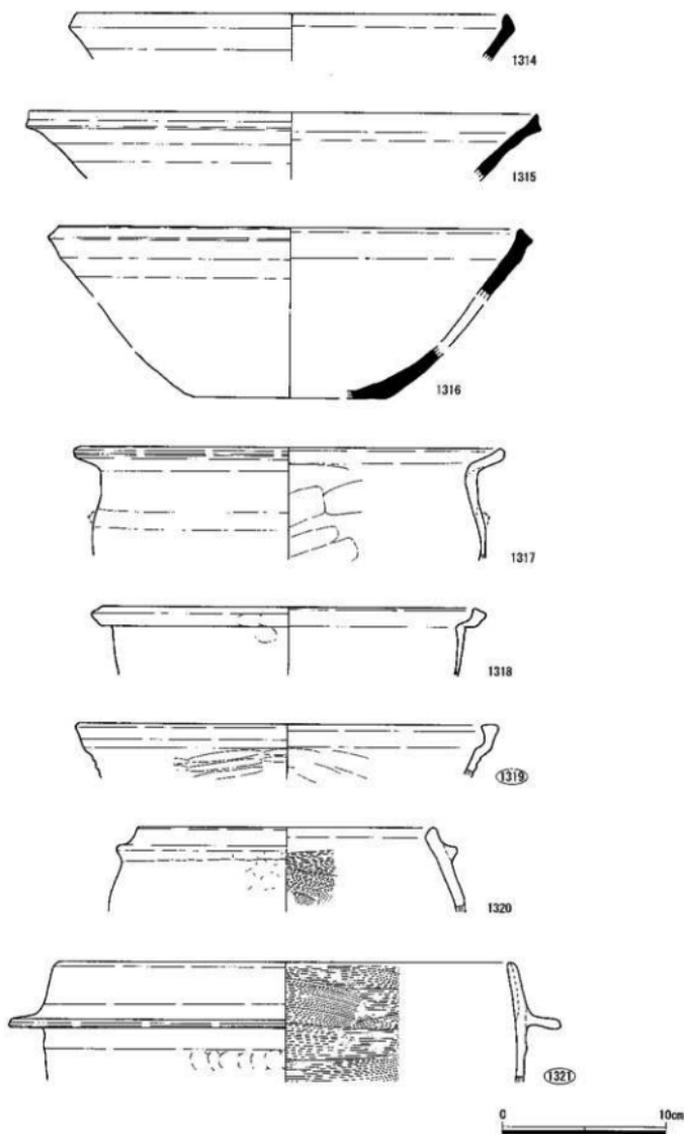
1308・1309は青磁皿。1308は釉の透明度高く、粗い貫入を伴う。大宰府分類の龍泉窯系青磁皿Ⅰ類か、同安窯系青磁皿Ⅰ類とみられ、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。1309は底部内面に櫛描のジグザグ文を施す。釉は透明度高く、貫入を伴う。前面施釉のち底部外面の釉を掻き取る。大宰府分類同安窯系青磁皿Ⅰ-2類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。

1310・1311は青磁碗。1310は体部内面にヘラ片影による草花文を施す。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類に相当し、12世紀中頃～後半の年代が与えられる。1311は体部外面にヘラ片影による蓮弁文を施す。鏝は省略する。釉に粗い貫入を伴う。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5 a類に相当し、13世紀初頭～前半の年代が与えられる。

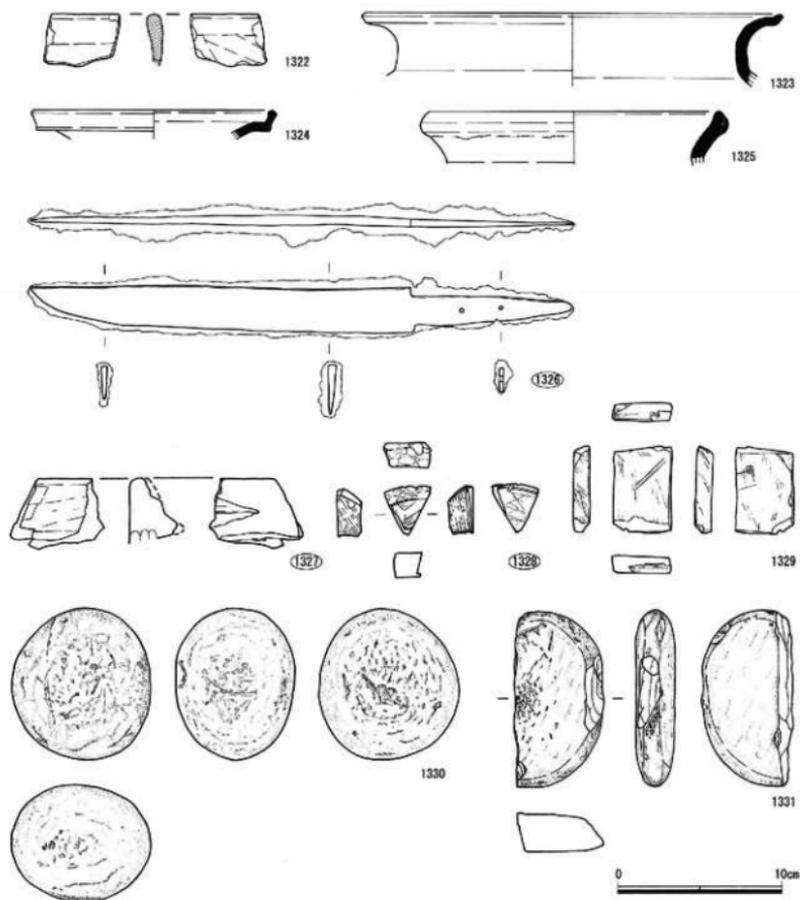
1312・1313は青白磁合子。1312は蓋で口径5.6cmを測る。ドーム状に膨らむ天井部を持ち、外面は型押し文を施す。内外面に施釉する。1313は身で、口縁に受け部をもつ。外面は型押しとみられる。口



第427图 I地区 第1包含层遗物实测图(1)



第428图 I地区 第1包含层遗物实测图(2)



第429图 I地区 第1包含层遗物实测图(3)

縁端部・受け部は釉を掻き取る。

1314～1316は東播磨系の須志質土器埴鉢。回転台成形で、1316は底部外面に回転糸切り痕を残す。ともに口縁部に吊焼による炭素付着がみられる。1314は森田編年Ⅱ期第2段階（12世紀末～13世紀初頭）、1315はⅡ期第1～2段階（12世紀中葉～13世紀初頭）、1316は第1期第2段階～Ⅱ期第1段階（11世紀末～12世紀後半）に相当するとみられる。

1317は紀伊型の土師質土器罎形鍋。口縁端部の拡張は弱く、頸部外面のヨコナデも不明瞭である。体部外面上位に鈔部の剥離痕がみえる。剥離部分も含めて外面に煤が付着する。胎上に結晶片岩のほか、金雲母とみられる粒子を含む。13世紀代と考えられる。1318は受口状口縁をもつ土師質土器鍋。胎土は精良で、金雲母を含む。被熱によってカーボンを消失した畿内山城地域産瓦質土器鍋の可能性もある。1319も受口状口縁の土師質土器鍋であるが、体部外面に目の大きな平行タタキを施す。兵庫津遺跡に類似がある。体部外面の平行タタキは播磨型羽釜などに共通する成形技法であることから、同地域からの搬入品である可能性が高い。13世紀後半～14世紀代と考えられる。

1320・1321は土師質土器羽釜。1320は断面台形状の低い鈔部を貼り付ける。体部内面に細かなヨコハケを施す。胎上に金雲母を含む。残存部の外面にタタキが確認できないが、長谷川編年播磨型羽釜Ⅳ期に相当し、15世紀後半～16世紀初頭の年代が与えられる。1321は高い口縁部と長く延びる鈔部をもつ。体部内面はヨコハケを施す。外面に煤が付着するが、鈔端部には煤付着がみられない。産地・時期ともに不明である。

1322は火鉢とみられる瓦質土器の口縁部。端部は丸みを帯びて、やや内傾する。炭素付着は良好である。

1323は常滑焼とみられる陶器製の口縁部。中野編年3～4型式に相当し、12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。1324は陶器製の口縁部で、端部を上方に拡張する。内外に施軸する。軸は茶褐色のため鉄軸とみられ、貫入を伴う。産地・時期は不明である。1325は須恵器製とみられる。産地・時期は不明である。

1326は鉄刀。全長33.0cm 刃渡り23.3cm 幅2.7cm 厚み0.6cmを測る。茎に円釘孔を2カ所穿孔する。

1327は滑石製石鍋。口縁は体部より厚みがある。木戸分類Ⅲ-a類とみられ、12世紀代の年代が与えられる。1328は円盤状の滑石を縦横約3cm 厚み1.6cmの三角形に切断したものである。表裏とも外周の円弧に沿って沈線（しんせん）を施す。石鍋転用の可能性がある。用途は不明である。1329は粘板岩製の砥石。6面を使用し、回転による円錐状の凹みが1カ所みられる。1330・1331は扁平な砂岩円礫を用いた叩石で、中央部に敲打痕を残す。

## 参考文献

- 平安学園考古学クラブ 1986『陶邑古窯址群Ⅰ』  
田川憲 2004『大楠遺跡出土の上師器の編年について』『大楠遺跡Ⅱ』  
横山浩一 1981『須恵器に見える車輪文叩き目の起源』『九州古代史研究所紀要』26号類別としては柿谷遺跡にあり（1994『西国縦貫道10』）

# 報告書抄録

ふりがな	みやのもといせき おおばらいせき しょうごかいせき							
書名	宮ノ本遺跡Ⅰ 大原遺跡 庄境遺跡							
副書名	桑野川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第76集							
編者名	高田尊彰・久保臨美朗・湯浅利彦・藤川智之・木村哲也・森水速男・白石 純・中原 計							
編集機関	財団法人 徳島県埋蔵文化財センター							
所在地	〒779-0108 徳島県板野郡板野町大伏字平山86番2 TEL 088-672-4545							
発行年月日	平成21年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
宮ノ本遺跡	徳島県阿南市 長生町宮ノ本 15他	36204	204-73	33° 54' 49"	134° 38' 02"	平成16年度 平成17年度 平成18年度	10,486㎡ 10,036㎡ 3,450㎡	桑野川床上浸 水対策特別緊 急事業に伴う 埋蔵文化財発 掘調査
大原遺跡	徳島県阿南市 長生町うその 口12他	36204	204-83	33° 54' 32"	134° 37' 29"	平成18年度	2,200㎡	
庄境遺跡	徳島県阿南市 富岡町庄境16	36204	—	33° 55' 06"	134° 38' 54"	平成18年度	1,000㎡	
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮ノ本遺跡	集落	縄文時代晩期	竪穴住居	縄文土器		縄文時代晩期・ 弥生時代前期の 集落		
		弥生時代前期	竪穴住居	弥生土器・サヌカイト製石器				
		古墳時代後期	竪穴住居	土師器・須恵器				
		平安時代後期 鎌倉時代 室町時代 江戸時代	大型掘立柱建物・掘 立柱建物・櫛列・区 画溝・焼成土坑	京都系土師皿・吉備系土師椀・ 備前焼碗・楠葉型瓦器椀・紀伊 型土師鍋・輸入陶磁器・銭貨・ 木製品				
大原遺跡	集落	弥生時代後期	溝・土坑	庄内式併行期前後の土器		庄内式併行期前 後の土器資料		
		室町時代後期 江戸時代前期	掘立柱建物群・溝・ 水田	土師質土器・埴埴				
庄境遺跡	集落	奈良・平安時代 鎌倉・室町時代 江戸時代	円面掘出土坑 掘立柱建物・溝・柱 穴	土師器・須恵器・須恵器門面 硯・和泉型瓦器椀		官衙の可能性		

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第76集  
宮ノ本遺跡Ⅰ・大原遺跡・庄境遺跡  
桑野川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告  
第1分冊

発行日 平成21(2009)年3月31日

編 集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
〒779-0108 徳島県板野郡板野町犬伏字平山86番2  
TEL 088-672-4545 FAX 088-672-4550  
発 行 徳 島 県 教 育 委 員 会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
印 刷 長 町 美 術 印 刷 有 限 公 社